

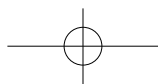
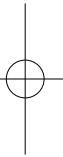
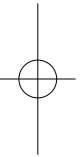
津古牟田遺跡 6

—福岡県小郡市津古所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書 第 333 集

2020

小郡市教育委員会



序 文

本書は、小郡市津古牟田遺跡6次調査（5次調査の一部を含む）の発掘調査報告書です。小郡市津古地内における宅地造成に先立って、小郡市教育委員会が平成29・30年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

発掘調査地点は、筑紫野市との市境に位置し、筑紫野市側は隈・西小田遺跡群として発掘調査が実施され、弥生時代の甕棺墓と集落が展開することがわかっています。今回の調査では、丘陵頂部に甕棺墓群が、その周辺には貯蔵穴、尾根上には周溝墓を確認することができました。この丘陵上における土地利用の在り方を示す貴重な発見となりました。

埋蔵文化財は、地域の歴史を語るうえで欠かせないものです。本書が文化財に対するご理解を得るものとして、地域の歴史に対する興味をもっていただくための材料として、さらには教育、学術研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査にご理解とご協力をいただいた地域住民のみなさま、そして現地作業にあたった地元作業員さんのみなさま、発掘調査を進めるにあたってお世話になった多くの方に感謝を申し上げ、序文といたします。

令和2年3月31日
小郡市教育委員会
教育長 秋永 晃生

例 言

1. 本書は、株式会社嘉賀工務店による宅地造成に伴い、小郡市教育委員会が平成30年度に実施した津古牟田遺跡6次調査の発掘調査記録である。平成29年度に実施した津古牟田遺跡5次調査の内容を一部含んでいる。
2. 平成30年度に『津古牟田遺跡5 弥生時代甕棺墓地編』を刊行済みで、津古牟田遺跡5のそのほかの遺構について、本報告書で報告する。
3. 津古牟田遺跡5の発掘調査は、宅地造成に先立ち、小郡市津古字牟田1209-2、1213、1256-2の959.88㎡において遺構を確認し、調査を実施した。津古牟田遺跡6の発掘調査は、宅地造成に伴う擁壁設置工事に先立ち、同地点214.13㎡において実施した。
4. 遺構の実測については、龍孝明の他に山崎頼人、一木賢人、近藤可奈、山田桃子、建神結香子、籐文華の諸氏に多大なる協力を得た。地形測量は（株）埋蔵文化財サポートシステムが行った。
5. 遺構全体の地形測量は株式会社埋蔵文化財サポートに委託した。
6. 遺構の写真撮影は龍が行い、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。
7. 遺構図中の方位は座標北を示し、全体図中の座標は世界測地系第Ⅱ系による。
8. 遺物、実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
9. 本書の執筆は龍が行なった。

本文目次

第1章 調査の経過と組織	1	2. 古墳時代の遺構と遺物	17
1. 調査の経過	1	1) 古墳	
2. 組織	1	2) 周溝墓	
第2章 位置と環境	2	3) 石棺墓	
第3章 津古牟田遺跡5の概要	4	4) 木棺墓	
1. 遺構の内容	4	5) 土壙墓	
2. 調査区の概要	4	3. 古代の遺構と遺物	25
第4章 津古牟田遺跡5の遺構と遺物	4	1) 土坑	
1. 弥生時代の遺構と遺物	4	2) 土壙墓	
1) 貯蔵穴		4. 小結	25
2) 土坑		第5章 津古牟田遺跡6の概要	27
3) 土壙墓		1. 遺構の内容	27
4) 祭祀土坑		2. 小結	27
5) 不明遺構			

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図(S=1/25,000)	3	第2図 津古牟田遺跡調査区位置図(S=1/5000)	3
第3図 津古牟田遺跡5・6全体図(S=1/500)	5~6	第4図 1・2号貯蔵穴平・断面図(S=1/40)	8
第5図 3・4号貯蔵穴 1号祭祀土坑平・断面図(S=1/40)	9	第6図 5・6・12・13号土坑平・断面図(S=1/40)	10
第7図 14・16・18号土坑平・断面図(S=1/40)	11	第8図 1号不明遺構平・断面図(S=1/60)	12
第9図 3号貯蔵穴・2~6号土坑出土土器実測図(S=1/4)	13	第10図 7・9・10・14・16号土坑出土土器実測図(S=1/4)	14
第11図 11号土坑出土土器実測図(S=1/4)	15	第12図 1号祭祀土坑・6号甕棺出土遺物実測図(S=1/2・1/4)	16
第13図 1号墳丘土層断面図(S=1/80)	18	第14図 2号墳平・断面図(S=1/40・1/80)	19
第15図 1・2号周溝墓周溝土層断面図(S=1/40)	20	第16図 1号周溝墓周溝内出土土器実測図(S=1/4)	20
第17図 1~4号石棺墓・3号木棺墓平断面図(S=1/40)	21	第18図 1・2号木棺墓平・断面図(S=1/40)	22
第19図 1~4号土壙墓平・断面図(S=1/40)	24	第20図 5~7号土壙墓平・断面図(S=1/40)	25
第21図 8号土坑・4号溝・2号土壙墓出土土器実測図(S=1/4)	26	第22図 石製品・土製品・鉄製品実測図(S=1/2)	28

図版目次

図版1 調査地全景(南上空から) 調査地全景(西上空から)	
図版2 1・2号周溝墓(上空から) 2号墳(上空から)	
図版3 1号貯蔵穴(南から) 3号貯蔵穴(北から) 3号貯蔵穴十字形石器出土状況(南東から)	
図版4 5号土坑(西から) 7号土坑(東から) 11号土坑(南東から)	
図版5 12号土坑(北から) 1号不明遺構(南西から) 1号不明遺構土層断面(東から)	
図版6 1号墳全景(南東から) 1号周溝墓(北東から) 1号木棺墓土層断面(南から)	
図版7 3号石棺墓石蓋検出状況(南西から) 3号石棺墓石蓋検出状況(西から) 2号木棺墓検出状況(南西から)	
図版8 4号石棺墓石蓋検出状況(南東から) 4号石棺墓検出状況(南西から) 5号土壙墓(南西から)	
図版9 出土土器写真	
図版10 出土土製品・石製品・鉄製品写真	

第1章 調査の経過と組織

1. 調査の経過

津古牟田遺跡5・6の発掘調査は、当該地において宅地造成が計画されたことに端を発する。当該地は、以前から宅地開発が検討されていた箇所である。平成29年3月25日付で照会文書（事前審査番号16172）が提出され、申請地の試掘調査を実施。その結果、一部に宅地造成に伴う地形改変が見られたが、地形改変を受けていない広範囲に遺構が存在することが明白であった。これにより、開発前に発掘調査が必要な旨を伝え、その後協議を重ねた。宅地開発は開発協議の段階であり、着工が未定であること。開発に先立ち、道路敷設が地形改変を受けている範囲でのみ先行して実施されること、その後、遺構の存在する宅地内道路の敷設にかかること、これらの意見を調整後、平成29年10月18日付けで委託契約を締結し、現地の発掘調査は平成29年10月31日に開始した。調査は、当初2月末の終了を目指していたが、開発計画の変更、調整により調査範囲が増加したことなどにより、調査期間の延長が図られ、実際に現地から撤収したのは平成30年3月31日のことであった。津古牟田遺跡6は、宅地造成に伴う擁壁設置工事に先立ち、平成30年5月11日付で委託契約を締結。平成30年5月16日から現地発掘調査を開始した。以下調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

[津古牟田遺跡5]

平成29年10月31日 表土剥ぎ開始 11月17日 遺構検出・掘削開始 12月4日 遺構配置図の作成開始 6日古墳の表土剥ぎを開始 19日工事との兼ね合いで調査範囲を一部拡張 21日2号木棺墓掘削
平成30年1月9日 西側道路部分の検出を開始 15日 西側道路部分完掘 16日 通路部分西側の検出と掘削開始 19日1回目の空撮 23日 古墳墳頂部の掘削を開始。25日より重機による表土剥ぎを行う 30日石棺墓検出 2月13日 鳥根大学学生参加 周溝墓掘削開始 20日 全体清掃後空撮 22日 古墳西側の旧表を除去 26日5・6・12号甕棺墓を半裁 3月2日 5号甕棺墓取り上げ 22日 古墳頂部甕棺墓群のレベル入れ開始 3月29日 平板測量を実施 3月31日 現場引き渡し

[津古牟田遺跡6]

平成30年5月16日表土剥ぎ開始 22日遺構検出・掘削開始 30日全景写真撮影・全体図作成 6月1日 現場引き渡し

2. 組織

津古牟田遺跡5・6の調査体制は以下のとおり。

<平成29年度>

5次現地発掘調査

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝
教育部 部長 山下博文
文化財課 課長 柏原孝俊
係長 杉本岳史
技師 龍 孝明

<平成30年度>

5次整理・報告書作成

6次現地発掘調査

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝
教育部 部長 黒岩重彦
文化財課 課長 柏原孝俊
係長 杉本岳史
技師 龍 孝明
嘱託 一木賢人

<平成31/令和元年度>

5・6次報告書作成

小郡市教育委員会

教育長 秋永晃生
教育部 部長 黒岩重彦
文化財課 課長 柏原孝俊
係長 杉本岳史
総務課 主任主事 龍 孝明
(平成31年4月1日より派遣
交流職員として鳥栖市勤務)

第2章 位置と環境

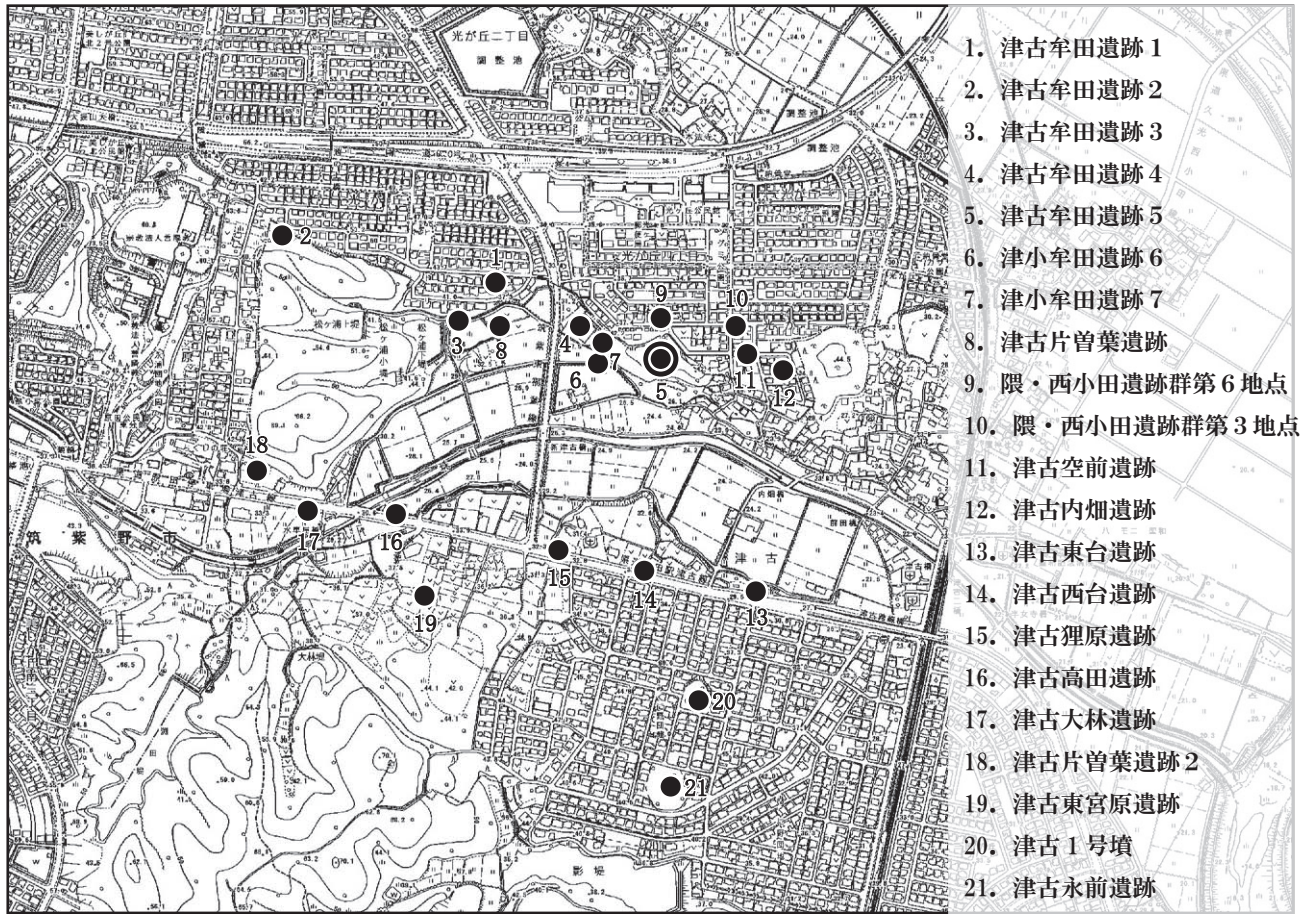
津古牟田遺跡の調査はこれまで4次にわたって行われている。1次調査（第1・2図1）は、昭和62年に宅地造成に伴って実施し、弥生時代中期初頭から前半、中期末、古墳時代後期、奈良時代と断続的に営まれた集落が検出された。このうち、貯蔵穴は弥生時代中期末のものが11基検出されており、床面から炭化米が出土している。2次調査（第1図2）は、昭和63年に宅地造成に伴って調査を実施し、弥生時代中期初頭から前半にかけての甕棺墓や木棺墓、古墳時代中期末の古墳が検出された。3次調査（第1・2図3）は、平成3年に市道改良工事に伴って調査を実施し、弥生時代中期の甕棺墓3基が検出された。4次調査（第1・2図4）は、平成13年に医院建設に先立つ調査を実施した。隈・西小田遺跡第6地点（第1・2図9）の南西側隣接地である。弥生時代中期を中心とする甕棺墓96基、祭祀土坑9基、石蓋土壙墓1基、箱式石棺墓1基などが検出された。

周辺の弥生時代後期から古墳時代の遺跡を概観すると、弥生時代後期には三国丘陵上で再び集落の形成が始まり、三国小学校遺跡、三国の鼻遺跡、みくに保育所内遺跡などが挙げられる。後期の墓地は横隈狐塚遺跡Ⅱがほぼ全容を知りうる好例である。横口式や足元掘込など多種多様な土壙墓が存在する。鏡片の伴出例も多く、集落と同様に鉄製工具もみとめられる。列埋葬は横隈上内畑遺跡2・3・4・5で後期から古墳時代初頭の土坑墓群が認められる。三沢畝道町遺跡では後期終末から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓群が検出されている。主体部は削平され、溝内からの出土土器もわずかであったものの、外来系の土器が含まれるなど、当地域の階層分化を探るうえで貴重な資料となっている。

古墳時代には、三国丘陵は墓域となり、宝満川流域の首長墓系列である津古生掛古墳、津古1号墳（第1図20）、津古2号墳、三国の鼻1号墳など前期古墳が集中する地域となる。また、平成23年に調査された津古永前遺跡（第1図21）では津古1号墳（第1図20）のすぐ南の丘陵頂部において、津古古墳群に先行する墳丘墓が確認された。

津古生掛古墳は、全長33m、後円部径28mを測り、南側に5mほどの突出部状の前方部がつく墳形である。庄内式並行期新段階の所産と考えられる。主体部は組み合わせ式木棺が納められていたが、削平により2分の1以上が破壊され、規模は不明である。古墳裾部からは5基の方形周溝墓、3基の木棺墓が検出されており、集団墓地のような構成となっている。この古墳の被葬者と近い人びとが埋葬されたものと思われる。この津古生掛古墳と同様に棺内に赤色顔料を塗布する古墳は筑紫野市隈・西小田遺跡6地点1号墳（第1・2図9）にみることができる。径20mの円墳で主体部は割竹形木棺を採用する。小郡市側の古墳とは主体部の構造が異なり、格差を生じている可能性がある。しかし、副葬品は鉄鏃のみであり、必ずしも割竹形木棺が優位を示しているわけではないようである。ほぼ同時期の築造と考えられる片曾葉1号墳（第1図18）は、東西7.5m、南北8.5mの規模をもつ長方形墳ともいえる墳丘形態をもつ。主体部は「H」形の組み合わせ式木棺で赤色顔料の塗布はみられないものの、生掛古墳と形態的に類似する。この丘陵上には多くの前期古墳が築造されているが、小規模なものがほとんどである。

三国の鼻1号墳は、全長66mを測る前期古墳である。前方部に2基、後円部に1基の主体部が確認され、墳頂には二重口縁壺が配置されていた。筑前焼ノ峠古墳は全長40.6mを測る九州最大の前方後方墳が築造されており、周溝からは二重口縁壺が出土した。ほぼ同時期の4世紀中頃に比定される。同町の松尾遺跡（夜須町）からは円形周溝墓などが検出されている。小郡市側では前期段階までの墳墓群はまだ検出されていないが、集落は弥生時代から連綿と続いている。大崎小園遺跡では庄内系土器が出土するが、庄内系土器の器形、技法の影響を強く受けた在地生産の土器である。三沢栗原遺跡は小規模ながらも周辺地域に同段階の集落が見られないことから、当地域における中心的な集落であった可能性がある。また、津古生掛遺跡87号住居からは古墳とほぼ同時期の土器がまとまって出土しており、古墳に伴う墓前祭祀的なものと考えられている。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 津古牟田遺跡調査区位置図 (S=1/5000)

第3章 津古牟田遺跡5の概要

1. 遺構の内容

検出された主な遺構は古墳3基、周溝墓2基、石棺墓4基、木棺墓3基、土壙墓7基、甕棺墓38基、貯蔵穴5基、土坑18基である（第3図）。

2. 調査区の概要

調査区の標高は最高所で48mを測る。北側は筑紫野市の住宅地となっており、隈・西小田遺跡群第6地点として調査が行われた。本調査区は同一丘陵上にあり、丘陵の南側尾根から南側斜面にあたる。

第4章 津古牟田遺跡5の遺構と遺物

1. 弥生時代の遺構と遺物

1) 貯蔵穴

1号貯蔵穴（第3・4図 図版3）

丘陵頂部から南側の下った標高43m付近で検出した。平面は楕円形を呈し、床面は円形を呈する。長軸1.82m、短軸1.32m、深さは最大で1.22mを測る。北西側でややオーバーハングする壁面をもち、南側は比較的緩やかな落ち込みとなる。床面は西側がやや深い。

出土遺物

弥生土器甕口縁部から胴部、甕底部等が出土した。

2号貯蔵穴（第3・4図）

上面は削平を受けるが、周辺の遺構配置、遺構形状から貯蔵穴と判断した。平面は円形で、長軸1.86m、短軸1.62m、現況で深さは最大0.49mを測る。床面はほぼ平坦である。

出土遺物はみられなかった。

3号貯蔵穴（第3・5図）

1号墳西側裾部で検出した。平面楕円形で、長軸1.51m、短軸1.05mを測る。上面は性格不明の掘り込みが広範囲に及んでいる。1号墳築造時の掘り込みであろうか。検出面からの深さは1.41～1.49mを測る。壁面はややオーバーハングし、床面は平坦をなす。

出土遺物（第9・23図）

弥生土器甕口縁部から胴部（第9図1）、甕底部（第9図2）が出土した。ほかに最上層より石庖丁（第23図1）、埋土中層やや上位から十字形石器（第23図5）が出土した。

4号貯蔵穴（第3図）

26号甕棺墓に切られる貯蔵穴である。丘陵頂部に位置する。平面円形か。径1.08m前後を測る。検出面からの深さは0.42～0.75mを測り、床面はほぼ平坦である。出土遺物はみられなかった。

2) 土坑

1号土坑（第3図）

調査区E区で検出した平面不整形の土坑である。長軸0.93m、短軸0.78mを測る。埋土は暗褐色土の単層で出土遺物なし。土壙として調査したが、周辺の遺構配置から攪乱と考えられる。

2号土坑（第3図）

1号土坑に隣接して検出した。平面長楕円形で長軸1.20m、短軸0.31mを測る。埋土は淡褐色土の単層。

出土遺物（第9図 図版9）

弥生土器甕口縁部から胴部（3）、甕底部（4）が出土した。

3号土坑（第3図）

2号土坑の南側で検出した。溝状遺構に切られる。平面楕円形で長軸 0.76m、短軸 0.48m を測る。北側床面にピット状の掘込みあり。出土遺物なし。土壌として調査したが、周辺の遺構配置から攪乱と考えられる。

4号土坑（第3図）

3号土坑西側で検出した。上面は攪乱により失われる。残存部で平面円形を呈する。長軸 0.85m、短軸 0.70m を測る。遺物は全て浮いた状態で出土しており、遺構に直接伴うものではない。流れ込みと考えられる。

出土遺物（第9図 図版9）

弥生土器甕蓋（5・6）、甕底部（7）が出土した。

5号土坑（第3・6図 図版4）

4号土坑の南側で検出した。南側は削平により失われている。残存部で東西 1.02m を測る。全容は明らかでないが、遺構形状から貯蔵穴の可能性はある。西壁はわずかにオーバーハングする。北側床面にピット状の掘り込みがあるが性格不明。東側から投げ込まれたようにまとまった土器が出土している。

出土遺物（第9図 図版9）

弥生土器甕（8～11）が出土した。

6号土坑（第3・6図）

調査区北端、1号墳西側、2号木棺墓北側で検出した。平面不整円形を呈する。長軸 2.39m、短軸 1.96m を測る。検出面からの深さは最大 0.34m と浅い。北東側にテラス状の段がある。廃棄土坑と考える。

出土遺物（第9図）

弥生土器甕口縁部から胴部（12・14）、甕底部（13）が出土した。

7号土坑（第3図 図版4）

6号土坑南西側で検出した。性格は不明。埋土は丘陵頂部側から流れ込んだものと考えられる。

出土遺物（第9図）

弥生土器壺口縁部から体部（1）、甕口縁部（2～4）が出土した。

9号土坑（第3図）

1号墳南側で検出した。平面円形で、ピットに切られる。未完掘であるが、性格不明。

出土遺物（第9図）

弥生土器壺口縁部（5）、甕底部（6）が出土した。

10号土坑（第3図）

1号墳南側で検出した。平面不整方形を呈し、南北 1.43m、東西 1.32m を測る。切り合い関係は不明瞭であったが、11号土坑を切ると考える。11号土坑と形状が似ており、貯蔵穴と考える。

出土遺物（第9図 図版9）

甕口縁部から胴部（7）、甕口縁部と同一個体の底部（8）が出土している。

11号土坑（第3図 図版4）

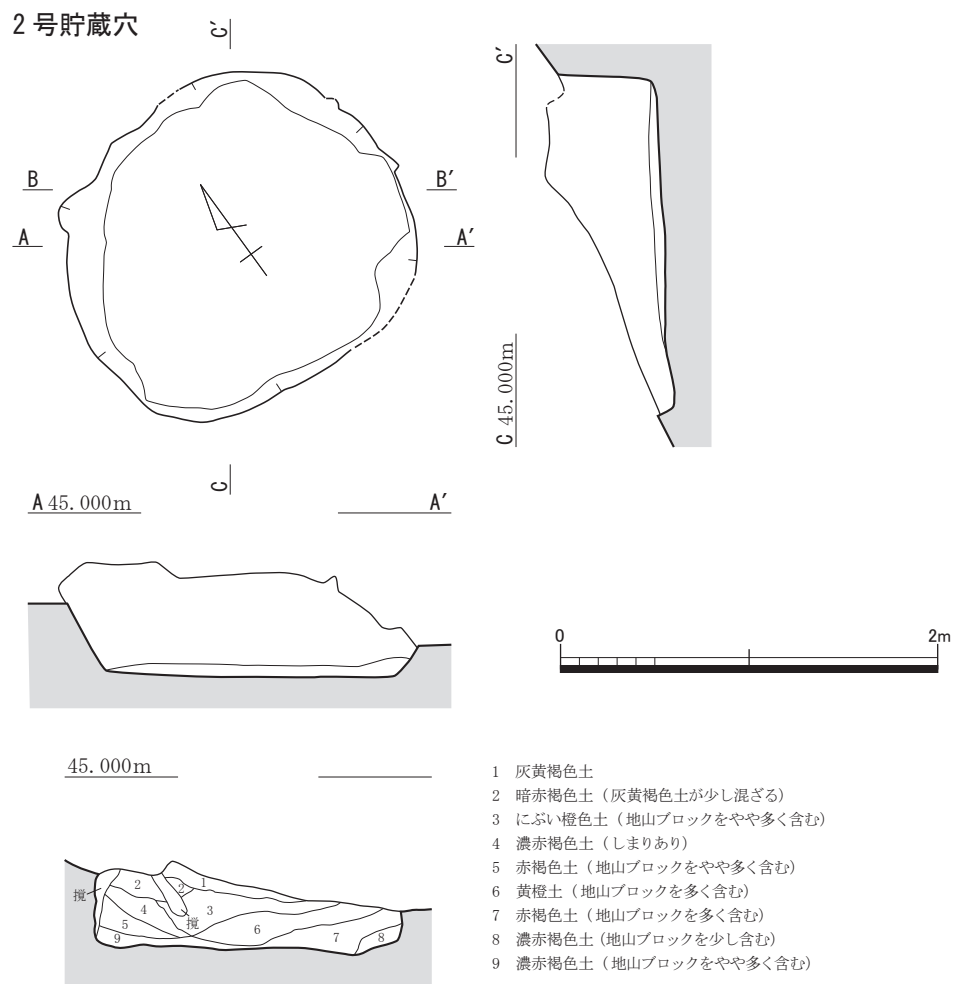
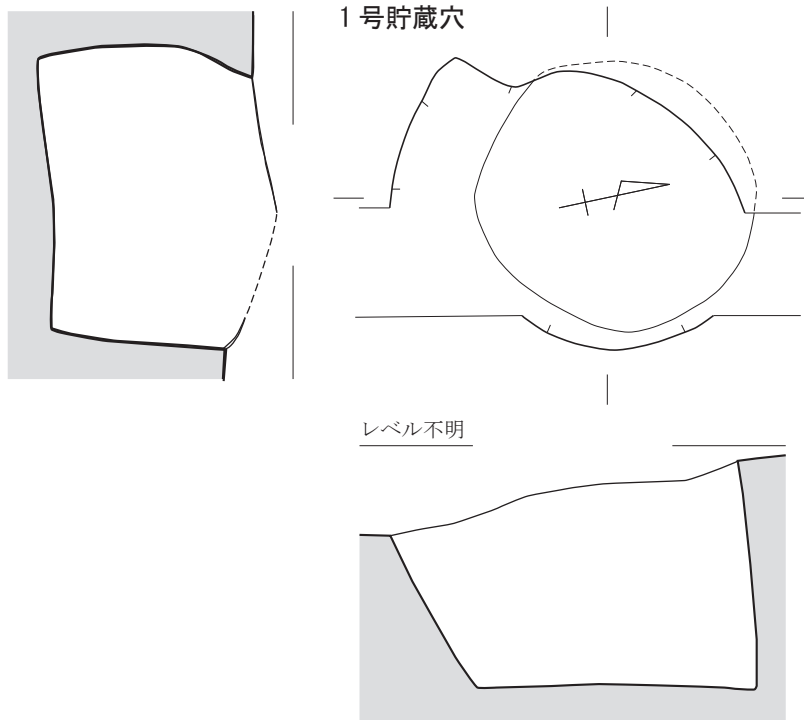
10号土坑に切られる平面方形の土坑である。床面に接して土器が出土した。東西 1.55m、南北 1.10m を測る。床面は円形を呈する。貯蔵穴と考える。

出土遺物（第11図 図版9）

弥生土器甕（1・2）、黒色磨研壺（3）小形の甕または鉢（4）が出土している。

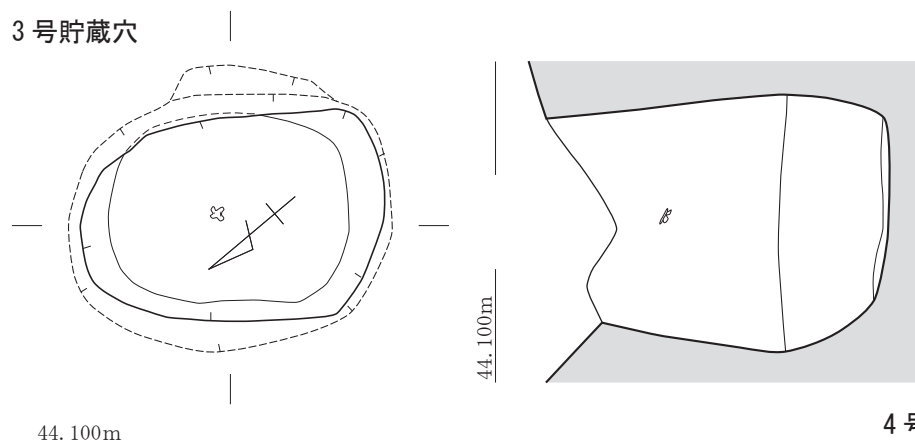
12号土坑（第3・6図 図版5）

1号墳南側で検出した。平面不整隅丸方形で、西側は階段状になり、東側は掘り込まれる。東側床面付近で平坦面をもつ自然石が2枚重なるように出土した。甕棺墓の可能性を考えていたが、自然石除去後掘り込み等は見られなかった。使用されなかった甕棺墓壙か。出土遺物はみられない。



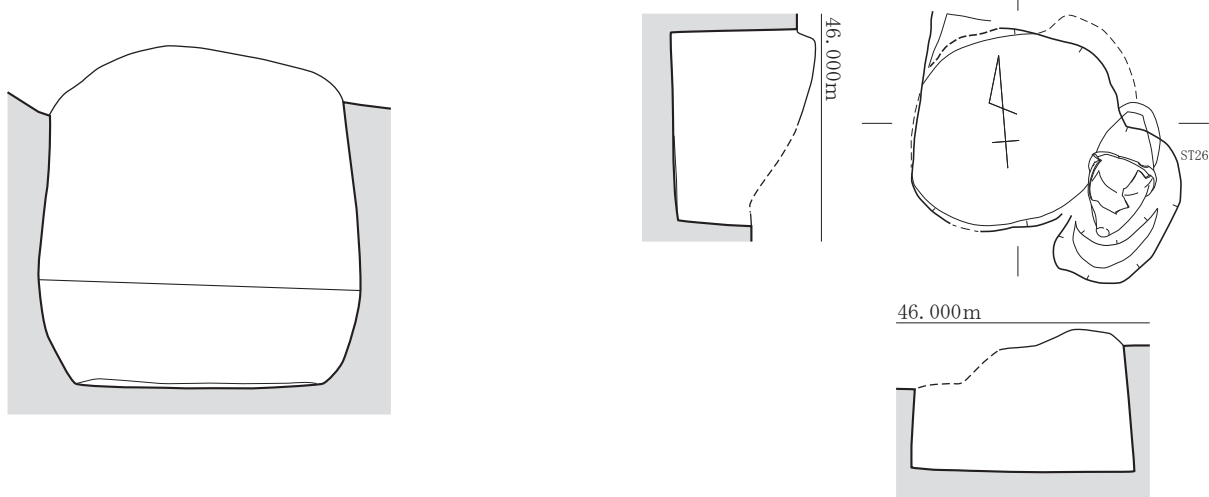
第4図 1・2号貯蔵穴平・断面図 (S=1/40)

3号貯蔵穴



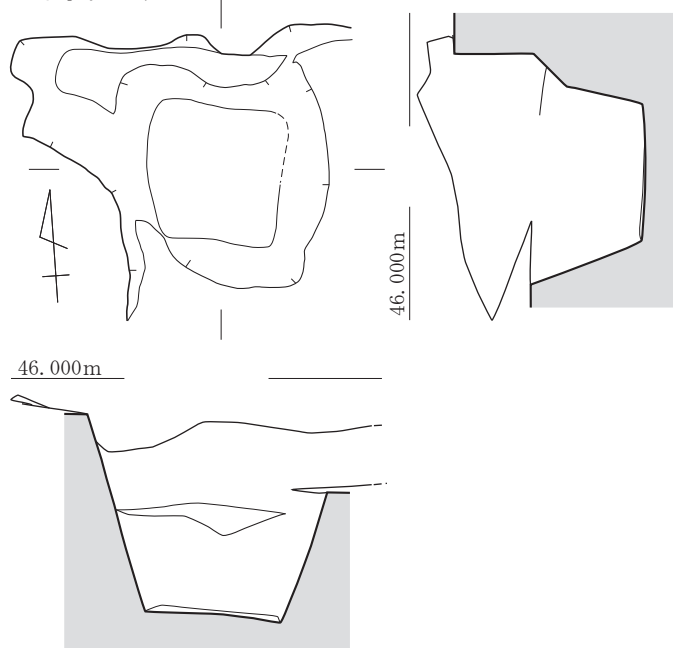
44.100m

4号貯蔵穴



46.000m

1号祭祀土坑



46.000m



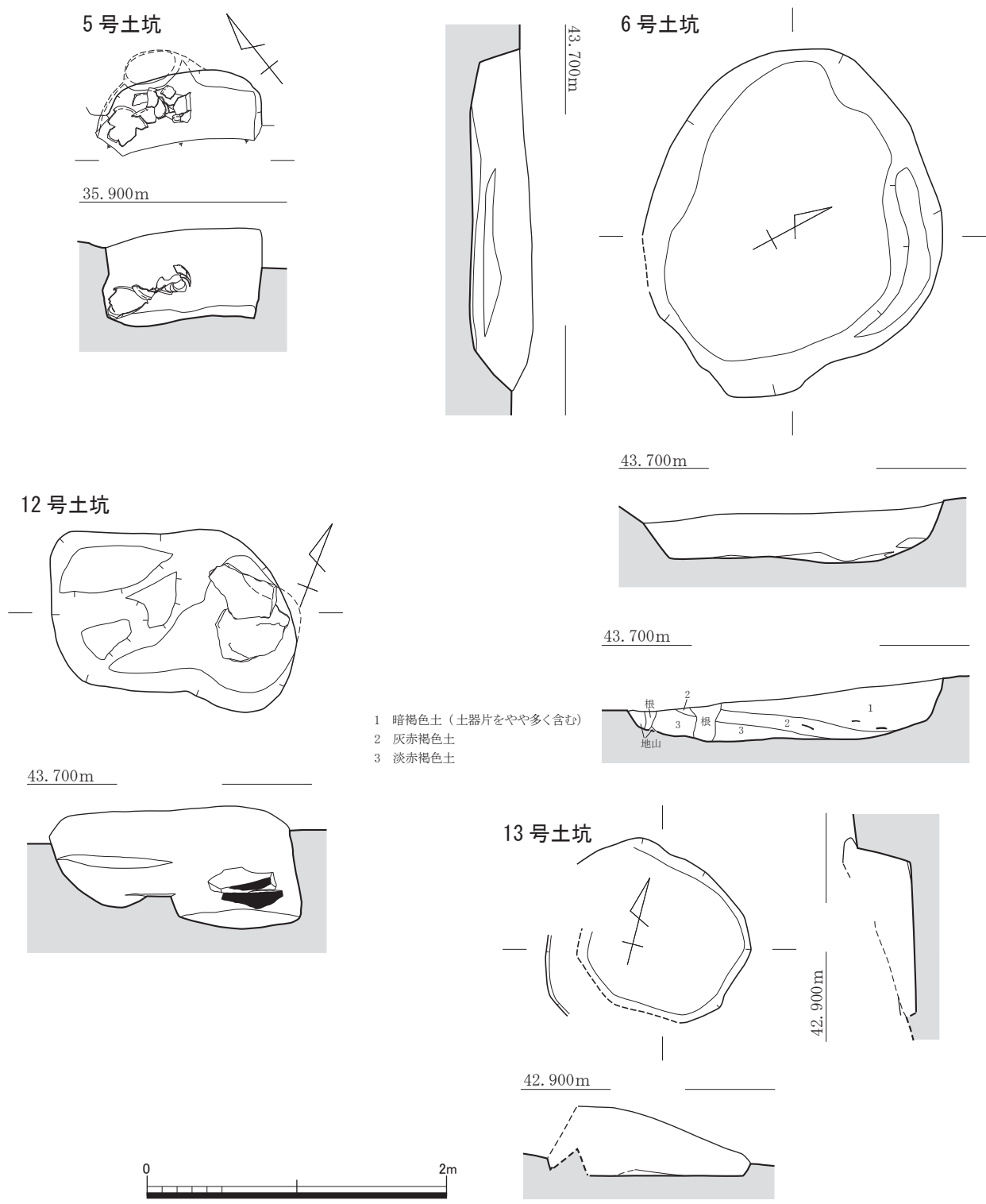
第5図 3・4号貯蔵穴 1号祭祀土坑平・断面図 (S=1/40)

13号土坑 (第3・6図)

15号甕棺墓に切られる。検出面からの深さは0.1m前後と浅く、出土遺物なし。性格不明。

14号土坑 (第3・7図)

28号甕棺墓の東側で検出した。丘陵頂部落ち際に位置しており、平面は卵型で南東側が開口する。長軸



第6図 5・6・12・13号土坑平・断面図 (S=1/40)

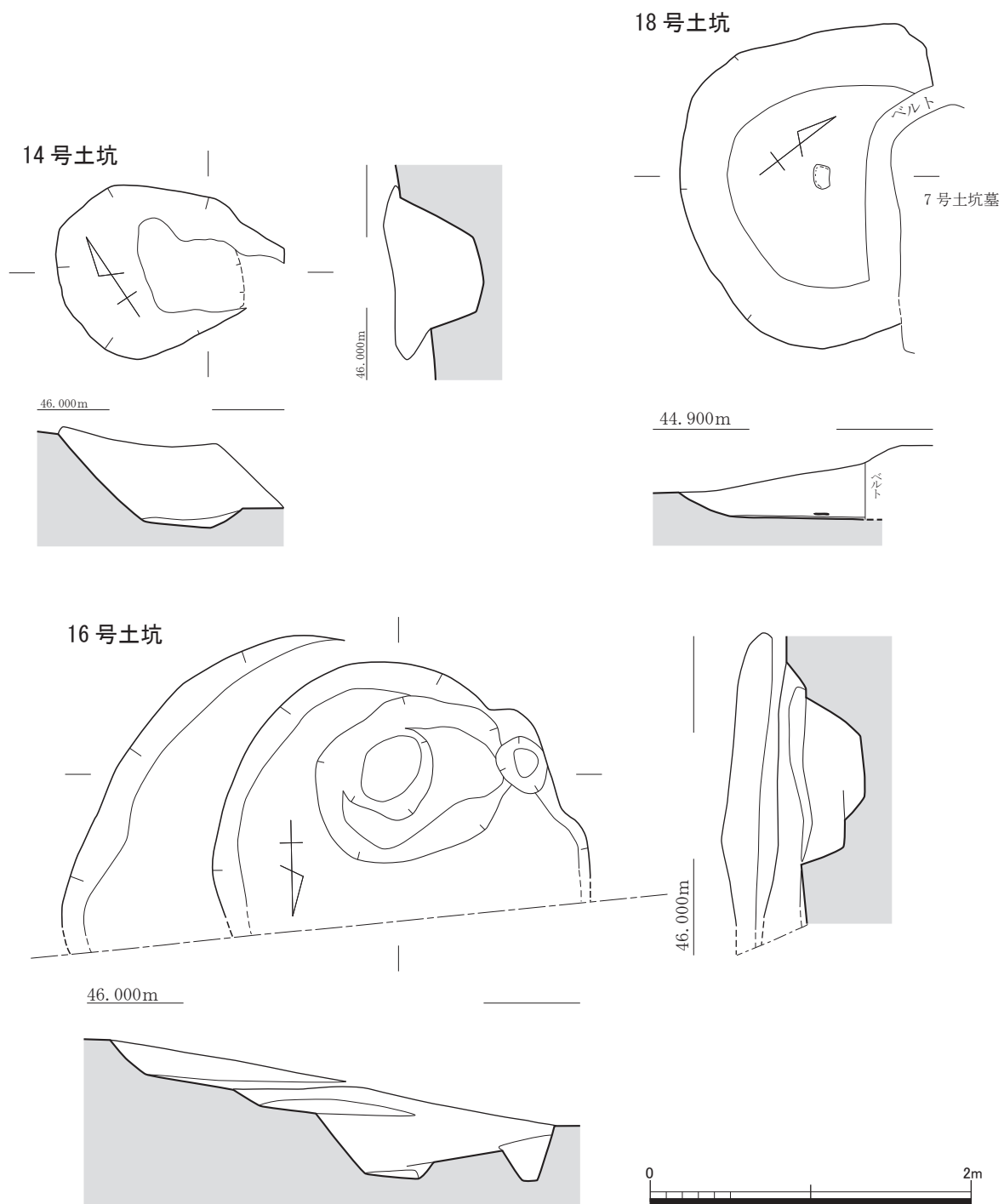
1.42m、短軸 1.09m を測る。

出土遺物 (第9図)

丹塗壺口縁部 (9) が出土した。

16号土坑 (第3・7図)

調査区北端で検出した。北側は調査区外へと続く。残存部で平面円形を呈すると考えられる。断面形はすり鉢状を呈する。長軸 1.69m を測る。



第7図 14・16・18号土坑平・断面図 (S=1/40)

出土遺物 (第9図)

大形甕口縁部 (10) が出土した。

18号土坑 (第3・7図)

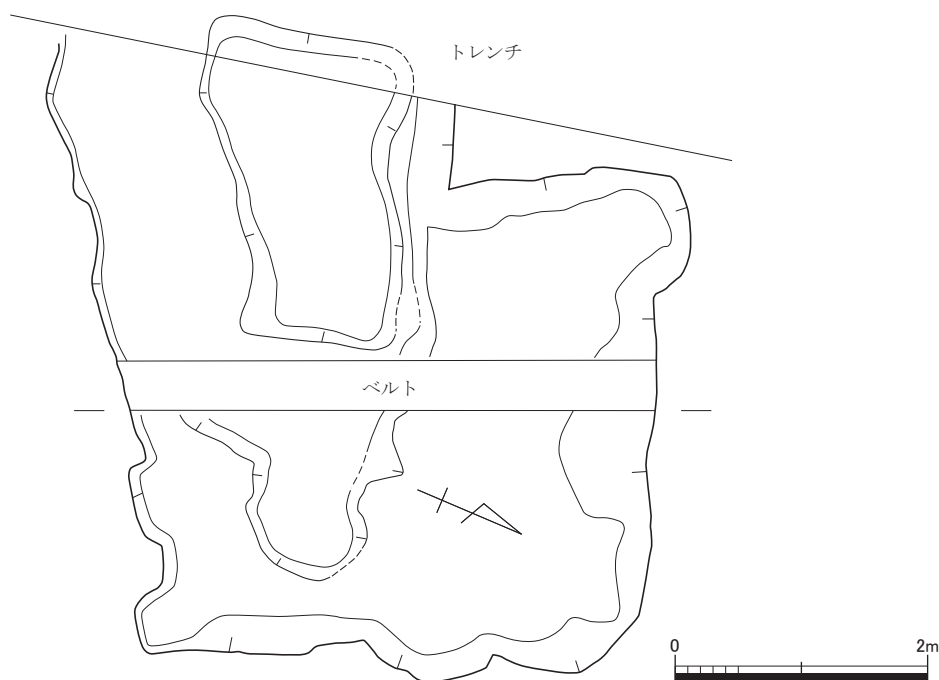
7号土坑墓に切られる。平面円形で径 1.97m 前後を測る。検出面からの深さは最大で 0.41m 程度と浅い。中央付近から自然石が1点出土したが性格不明。

3) 土坑墓

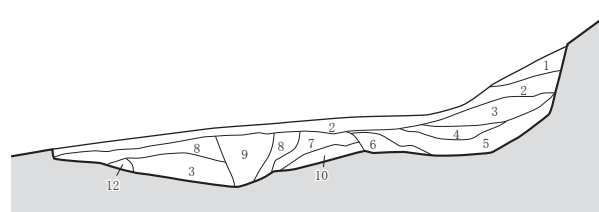
3号土坑墓 (第3・19図)

11号甕棺墓に隣接して検出した足元掘り込み式の土坑墓である。平面円形で長軸 1.57m、短軸 1.43m を

1号不明遺構



45.400m



- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 黄褐色土 (0.5～3cm大の礫を含む) | 7 褐色土 (0.1～0.5cm大の礫・地山の礫を含む) |
| 2 褐色土 (0.3～1cm大の礫を含む) | 8 褐色土 (0.2～0.7cm大の礫・地山の礫を含む) |
| 3 褐色土 (0.2～2cm大の礫・粘質土・土器を含む) | 9 暗褐色土 |
| 4 にぶい黄褐色土 (0.4～1.7cm大の礫・炭を含む) | 10 橙粘質シルト |
| 5 暗褐色土 (0.1～0.4cm大の礫・地山の礫を含む) | 11 灰褐色砂質土 (～2cmまでの地山ブロックを含む) |
| 6 地山のブロック | 12 10層と同じ |

第8図 1号不明遺構平・断面図 (S=1/60)

測る。墓壙は北側に掘り込まれ、東西に軸をとる。床面で1.14m、幅0.39mを測る。出土遺物はみられない。

4) 祭祀土坑

1号祭祀土坑 (旧5号貯蔵穴) (第3・5図)

28号甕棺墓に隣接して検出した。丘陵頂部落ち際に位置する。甕棺墓壙との切り合いにより平面は不明瞭である。現状で不整形を呈する。長軸1.10m、短軸1.07mを測る。上面のほとんどが失われている。

出土遺物 (第9図 図版9)

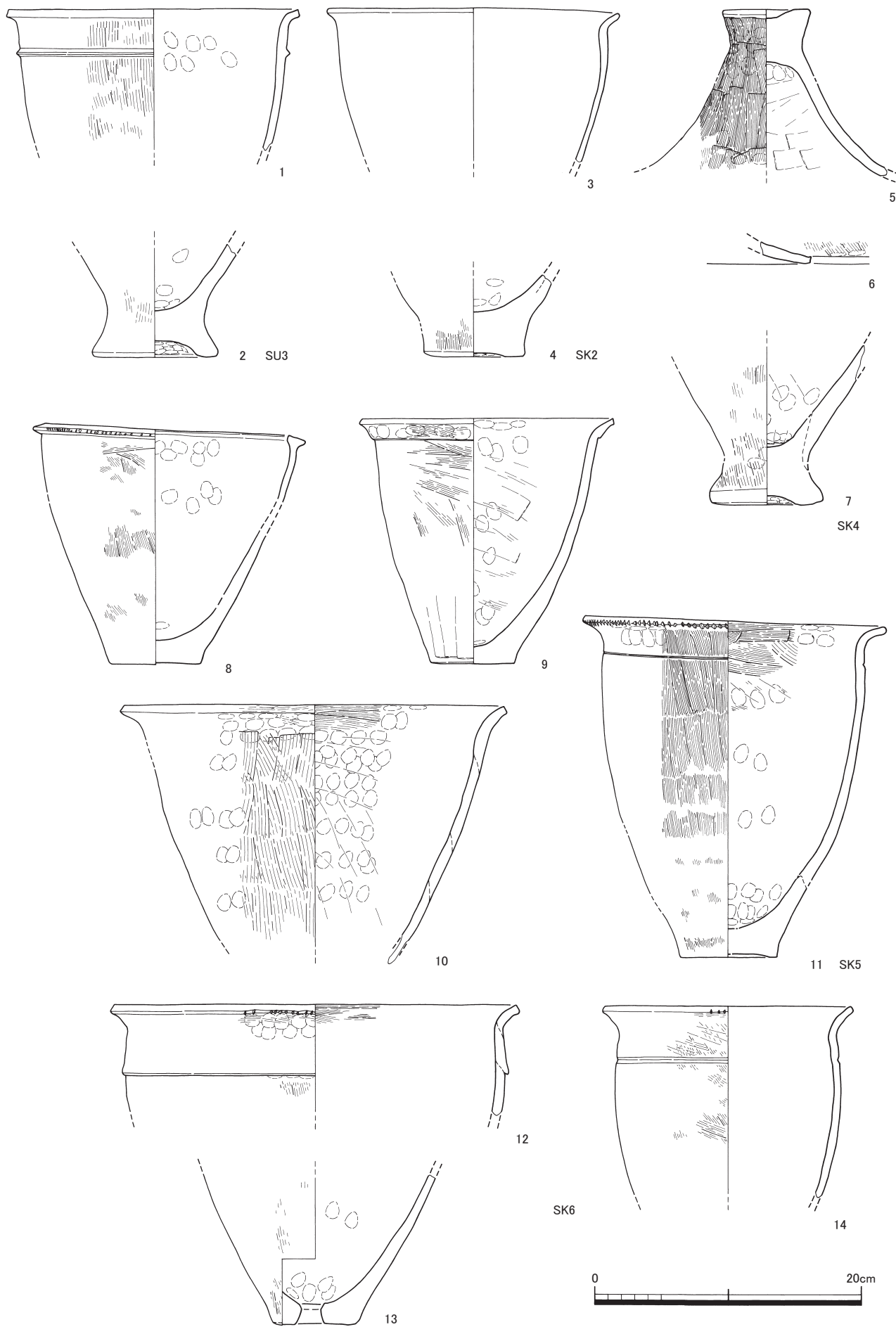
弥生土器甕 (1・2)、丹塗高坏口縁部 (3)、丹塗高坏脚部 (4) が出土した。

*なお、『津古牟田遺跡5 弥生時代甕棺墓地編』2019で掲載漏れのあった6号甕棺出土勾玉の実測図 (第12図5) 写真 (図版10) を掲載した。お詫びいたします。

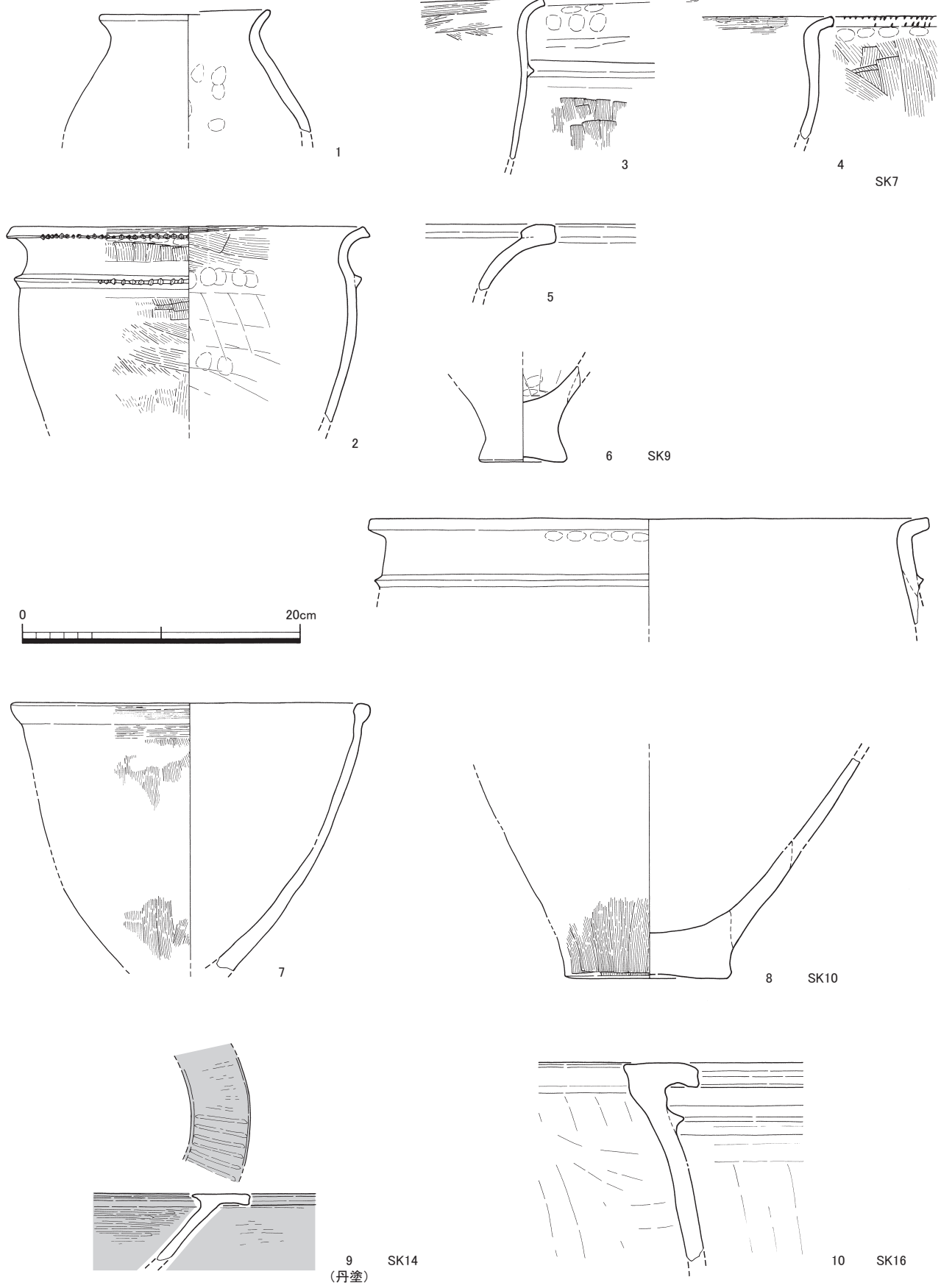
5) 不明遺構

1号不明遺構 (第3・8図 図版5)

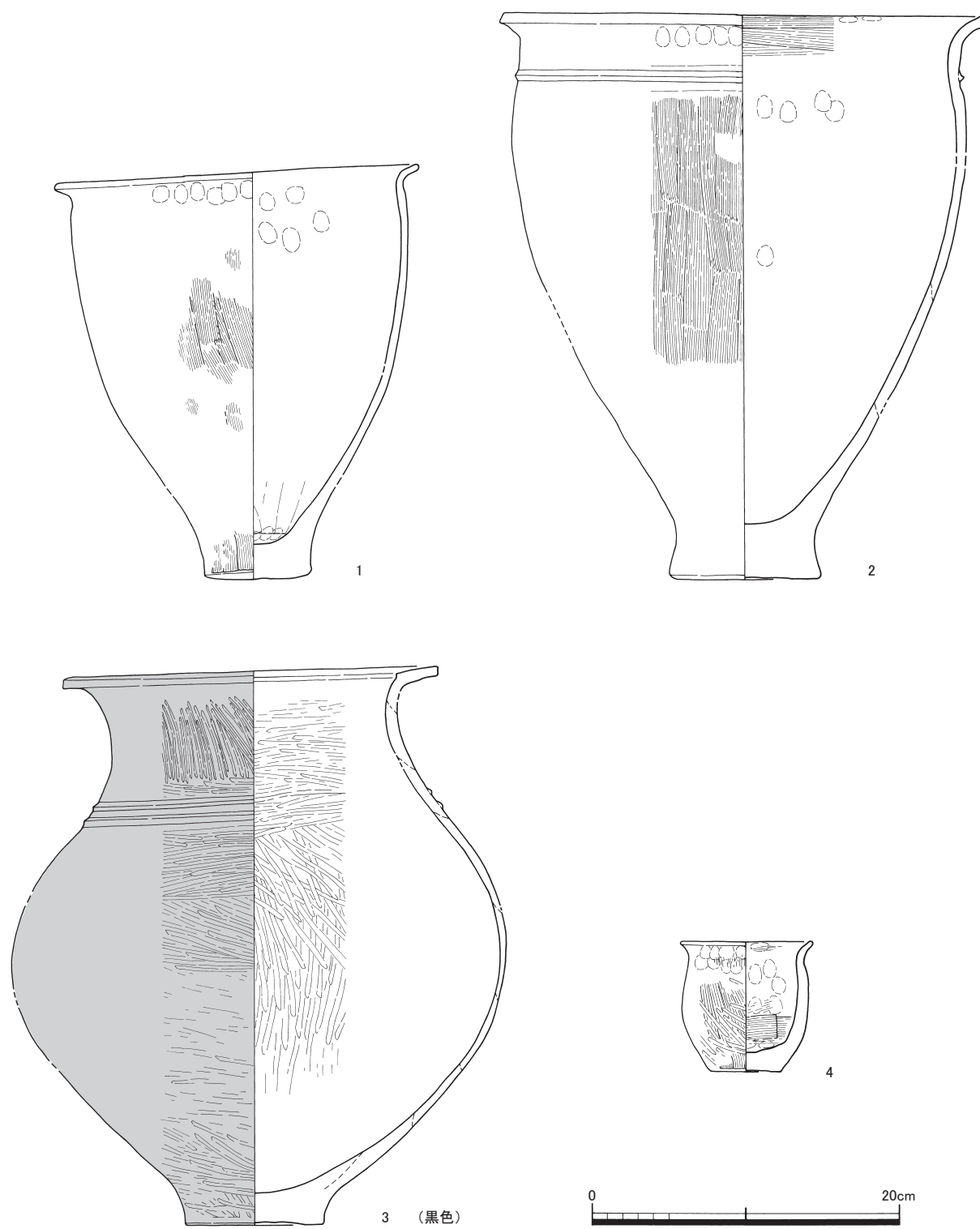
1号墳頂部東側斜面で検出した。北壁はほぼ垂直に削り出し、床面は東側で凹凸が著しいが、西側では平坦面をつくる。古墳築造以前と考えられる。岩盤を掘り込んでいるため粘土採掘坑とも考えにくい。



第9图 3号貯藏穴・2~6号土坑出土土器実測図 (S=1/4)



第10图 7·9·10·14·16号土坑出土土器实测图 (S=1/4)



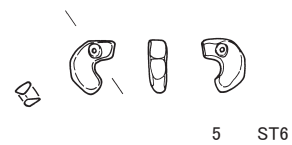
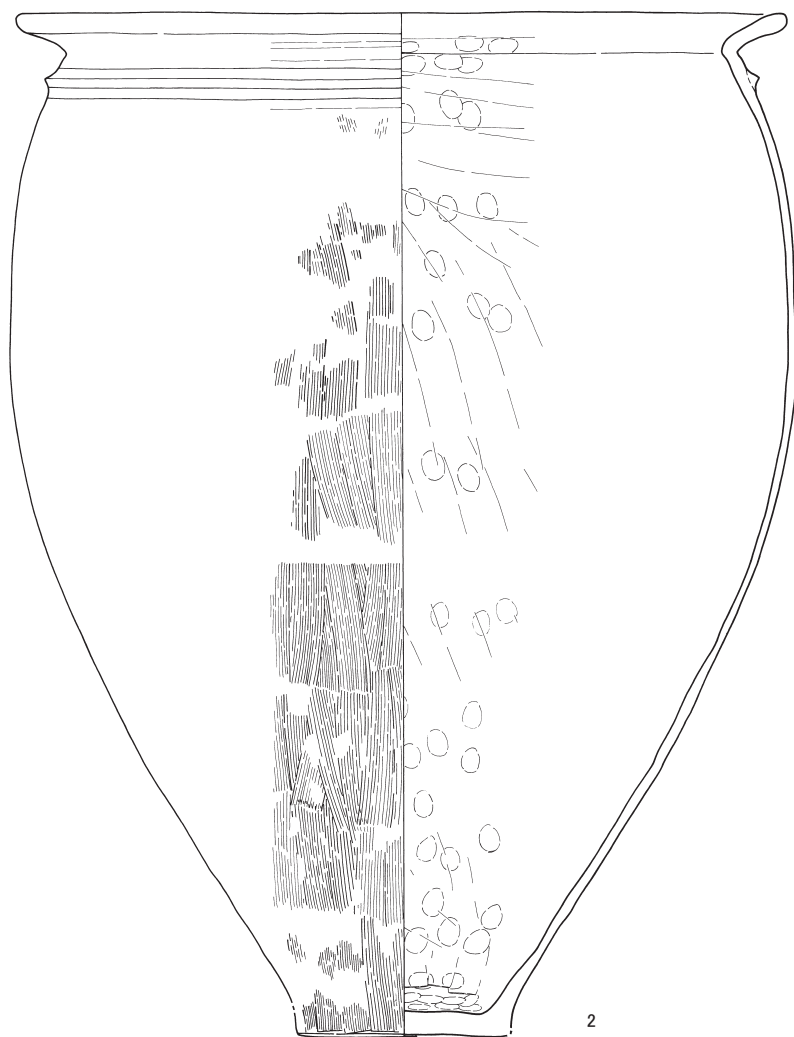
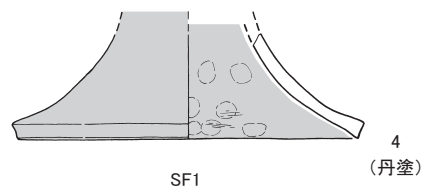
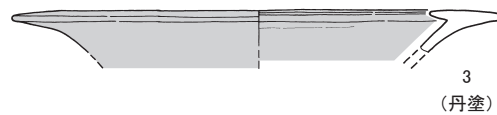
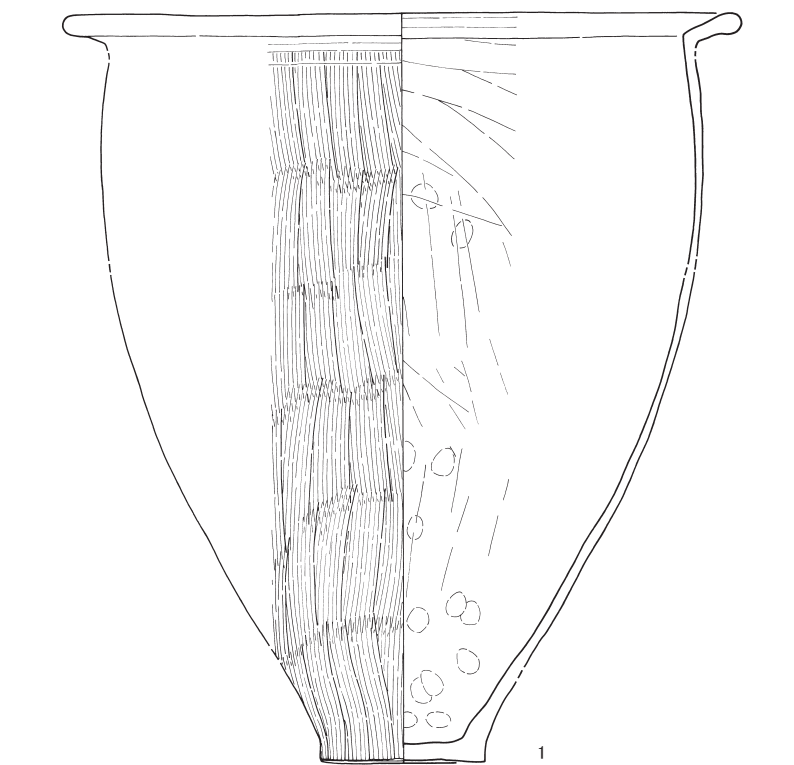
第11図 11号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

2号不明遺構 (第3図)

1号墳南側で検出した。広範囲に広がっているが、明確なプランはつかめなかった。不明遺構として調査したが、自然地形と考えられる。床面は凹凸があり、北側は段落ちとなる。わずかに遺物が出土した。

3号不明遺構 (第3図)

1号墳西側裾部付近に広がる。複数の遺構の切り合いとも考えられるが、それぞれの遺構プランは不明瞭である。不明遺構として報告する。出土遺物はみられない。



第12図 1号祭祀土坑・6号甕棺出土遺物実測図 (S= 1/2・1/4)

2. 古墳時代の遺構と遺物

1) 古墳

1号墳（第3・13図 図版6）

調査区北端の最高所に立地する古墳である。北側3分の2と内部主体は筑紫野市により隈・西小田遺跡群第6地点で調査されており現存しない。主体部は筑紫野市の調査によって、割竹形木棺であることが明らかとなっている。ここでは、津古牟田1号墳として報告する。

墳丘規模は東西残存部で約25.53m、南北約17.16mを測る。墳裾は標高44m付近と考えられる。裾部はなだらかに丘陵平坦面につながっており、不明瞭である。東側は丘陵の段落ち部と重なっているため、東側から見ると、見かけの大きさは実際の規模以上に大きく見える。なお、墳丘には、葺石や段築は認められなかった。墳丘の築成方法は、まず、地山の花崗岩はいらん土および岩盤を削りだして、地山を成形し、墳丘斜面および墳丘頂部に盛土を施している。墳丘頂部は甕棺墓地として整地された平坦面を利用しており、甕棺墓地上に盛土を施している。

2号墳（第3・14図 図版2）【津古牟田5報告書全体図で3号墳としているもの】

調査区北端西側で検出した。調査範囲が狭小であったため、全容は明らかでない。墳丘は確認できず、周溝のみ検出している。周溝は直線的にのび、角は直角に曲がることから方墳と考えられる。規模を確認できるのは南側のみであるが、1辺10.64mを測る。周溝の幅は1.13～1.99mを測る。西側と南側の周溝接点は段がつく。周溝内から自然石が埋没した状態で出土した。周辺状況から石棺墓の石材と考えられるが、古墳築造時に既にあったものか周溝埋没過程の早い段階で流れ込んだものか判断できなかった。周溝の内側で4号石棺墓を検出しているが、やや周溝側に偏っていることから、古墳に伴うものか不明である。

3号墳（第3図）（1・2号石棺墓・13号甕棺墓検出地点）

2号墳西側で検出した。墳丘が残るが、調査範囲狭小で墳形は明らかでない。西側は周溝状の落ち込みがあり、墳丘規模に対して幅が不自然に広く不明瞭で、東側は周溝が確認できなかった。隈・西小田遺跡群第6地点調査時にトレンチ調査が実施されている。墳丘下層から1・2号石棺墓、13号甕棺墓を検出した。

2) 周溝墓

1号周溝墓（第3・15・16図 図版2・6）

1号墳の南側墳丘裾部付近、斜面の落ち際に位置する。表土直下で検出した。当初は2号墳として調査を実施したが、周辺の土層断面を精査した結果、墳丘が認められなかったことから、周溝墓とした。ただし、周辺は既に削平を受けており、墳丘が失われている可能性もある。周溝には切り合いが見られ、調査時は掘り直しと考えていたが、主体部が2基重なっていることから、2基の周溝墓が切り合っていたと考えられる。先行する遺構は、円形周溝墓である。径9.50mを測り、南側は削平により周溝が遺存しない。周溝は幅1.21mを測る。主体部は1号木棺墓と考えられる。後出する遺構は、上面削平を受けているが、周溝墓と考える。北西端が失われており詳細は明らかでないが、方形周溝墓か。主体部は1号木棺墓を切るが、検出時に切り合い関係を捉えられなかったため、詳細は不明である。第15図第2層が該当する。残存部から長軸1.88m、短軸0.70mを測る。残存部で深さ0.20mしか残っておらず、上面が削平を受けていることは明らかである。墳丘があった可能性が考えられる。周溝より、土師器小型丸底壺（1・2）、壺（3）が出土した。

2号周溝墓（第3・15図 図版2）

調査区南端、1号周溝墓西側に接して検出した円形周溝墓で、上面は大きく削平を受けていることから円墳の可能性もある。1号周溝墓が切ると考える。径13.05mを測り、1号円形周溝墓を切る。周溝幅は1.47m、深さは最大で0.66mを測る。南側は周溝が巡らず、陸橋状となる。主体部は3号木棺墓である。主体部は3号木棺墓である。淡緑白色粘土が部分的に見られたことから、粘土槨木棺墓と考えられるが、遺存状態が極めて悪く、詳細は明らかにできなかった。出土遺物はみられなかった。

3) 石棺墓

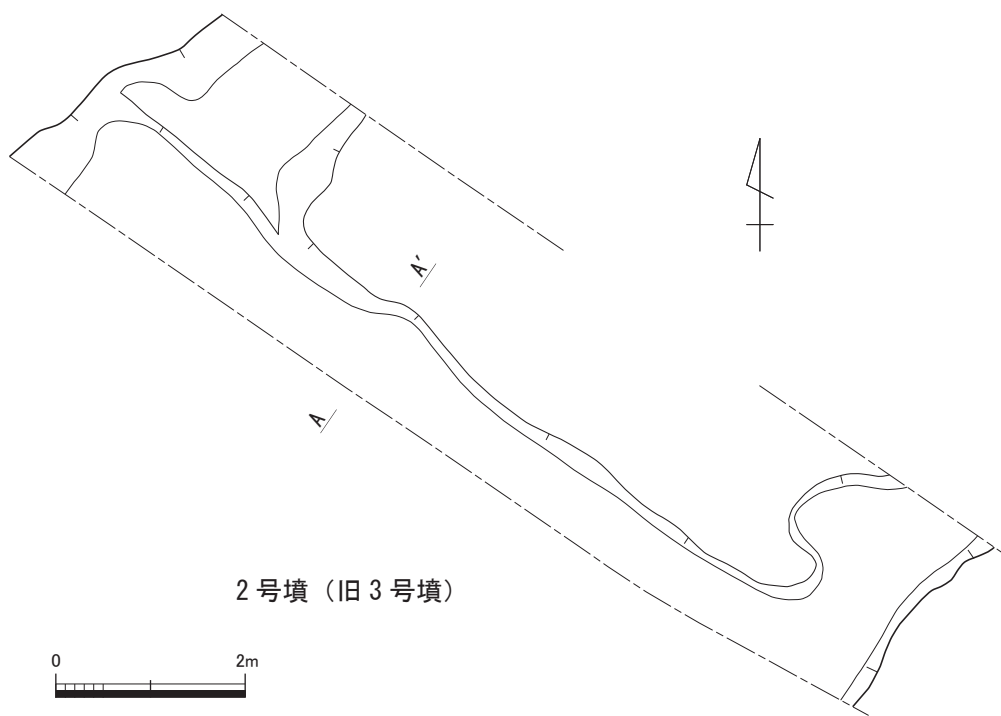
1号石棺墓（第3・17図）

5号墳西側で検出した石棺墓である。長軸1.05m、短軸0.33mを測る。頭位側側石と小口石の3点が確認できる。東側墓壙には石材痕跡がなく、当初から石材がなかったと考えられる。いわゆる半石棺墓である。

1号墳墳丘トレンチ



第13図 1号墳墳丘土層断面図 (S=1/80)

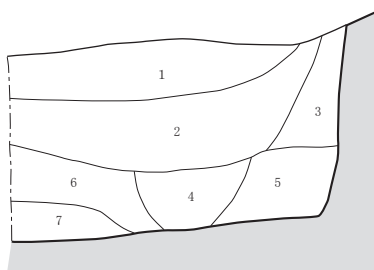


2号墳 (旧3号墳)



A 39.000m A'

- 1 暗褐色土
- 2 淡灰黒色土 と暗褐色土が混ざる
- 3 淡灰黒色土と黄褐色土が混ざる
- 4 淡灰黒色土と暗黄褐色土が混ざる
- 5 淡灰黒色土と明黄褐色砂のマーブル状
- 6 淡灰黒色土
- 7 淡灰黒色土と暗黄褐色土が混ざる



第14図 2号墳平・断面図 (S=1/40・1/80)

墓壙の掘り方は確認できなかった。小型の石棺墓である。出土遺物はみられなかった。

2号石棺墓 (第3・17図)

1号石棺墓に隣接して検出した石棺墓である。1号石棺墓とは軸が90度異なる。長軸2.25m程度となる。短軸0.46mを測る。1号石棺墓と同様、半石棺墓で、南半は側石が見られない。床面に石材の痕跡も見られないことから、当初より存在しなかったと考えられる。出土遺物はみられなかった。

3号石棺墓 (第3・17図 図版7)

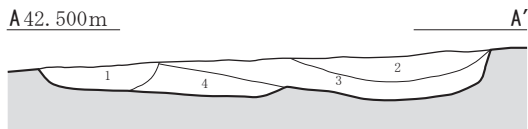
3号墳西側で検出した石棺墓である。墓壙の平面は長方形で、2段掘りである。1次墓壙は長軸1.20m、短軸0.77mを測る。内法は長軸0.58m、短軸0.25mを測る。2次墓壙は南側に偏っている。4点の板状自然石で蓋をする。南北ともに側石は2点で、南側は隙間を埋めるように自然石1点が配置される。出土遺物はみられなかった。

4号石棺墓 (第3・17図 図版8)

3号墳周溝内側で検出した石蓋石棺墓である。平面長方形を呈し、2段掘りである。1次墓壙は長軸2.61m、短軸1.30mを測る。棺の内法は長軸1.84m、短軸0.31mを測る。棺は墓壙と軸が異なる。蓋石内面にわずかに朱が付着するが、範囲不明瞭。6点の板石状自然石で蓋をする。側石のうち北側は4石、南側は3石、小口石で構成される。蓋石の噛み合わせのためか、側石上に拳大の自然石3点が置かれる。出土遺物はみられなかった。

1号周溝墓

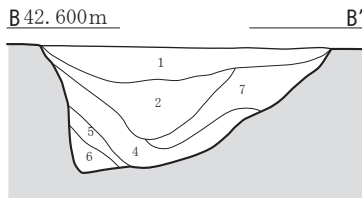
A 42.500m



- 1 灰黒色土
 - 2 黒色土
 - 3 暗灰褐色土
 - 4 暗褐色土
- } 1号円形周溝墓

2号周溝墓

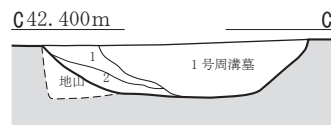
B 42.600m



- 1 灰黒色土
- 2 黒色土 (土器片を少し含む)
- 3 暗褐色土
- 4 暗黄褐色土に淡灰黒色土が混ざる
- 5 暗黄褐色土 (灰黒色土ブロックをやや多く含む)
- 6 黄褐色土 (灰黒色土ブロックをわずかに含む)
- 7

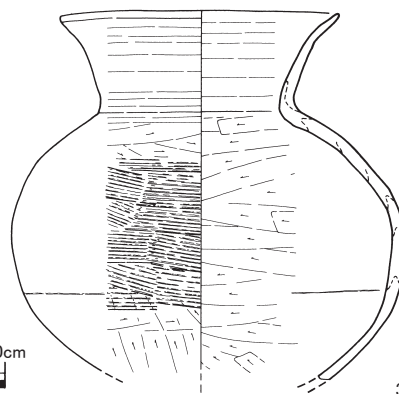
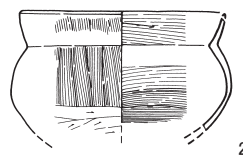
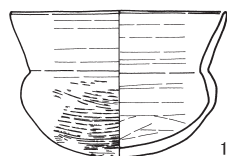


C 42.400m



- 1 灰緑色粘土
- 2 暗灰緑色粘土

第15図 1・2号周溝墓周溝土層断面図 (S=1/40)



第16図 1号周溝墓周溝内出土土器実測図 (S=1/4)

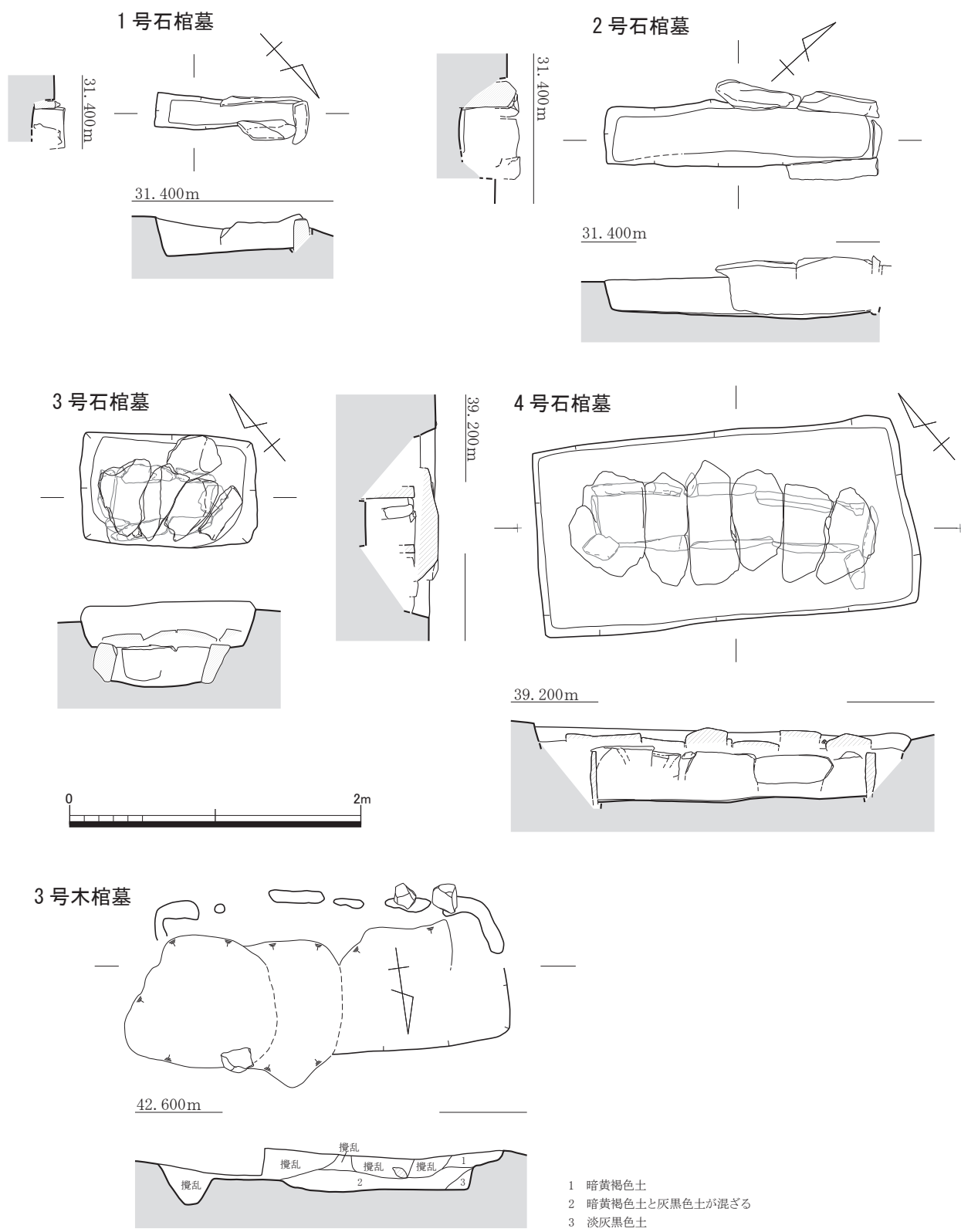
4) 木棺墓

1号木棺墓 (第3・18図 図版6)

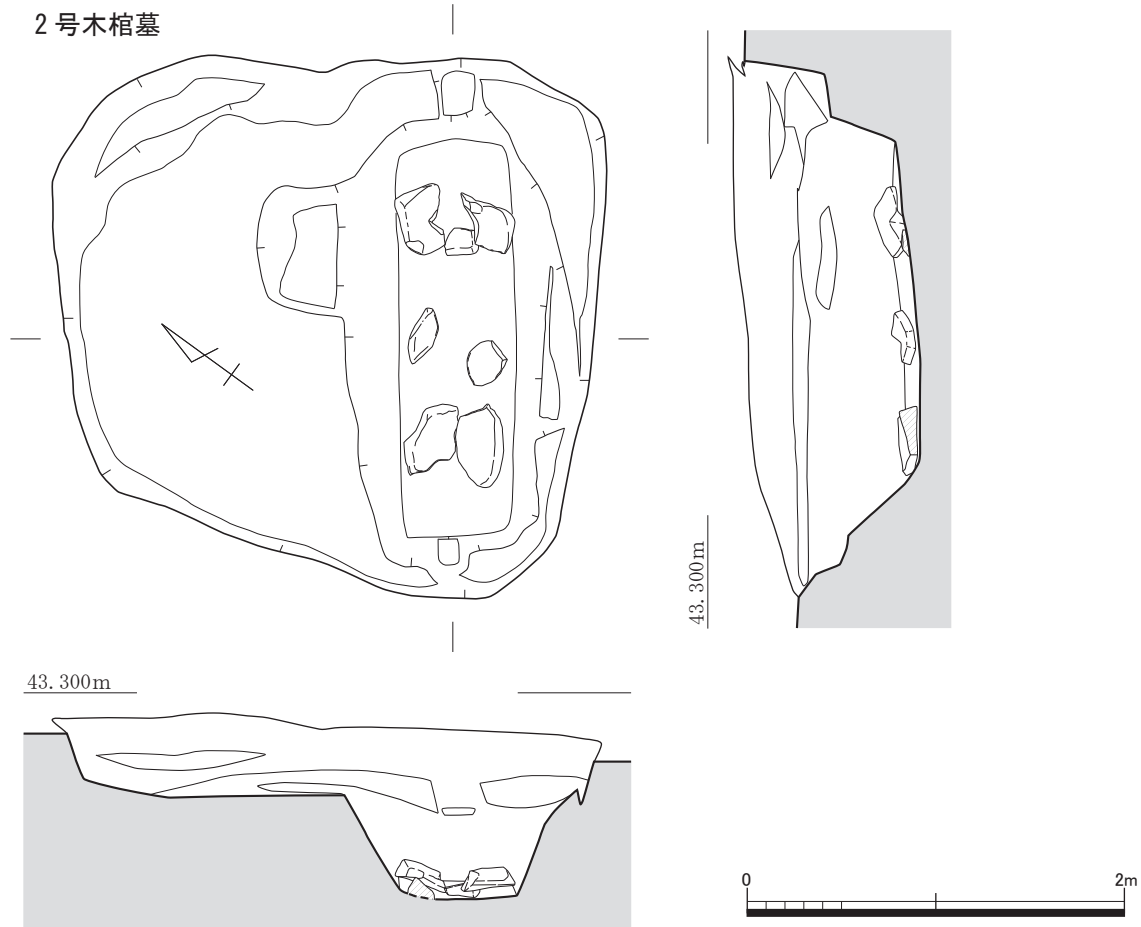
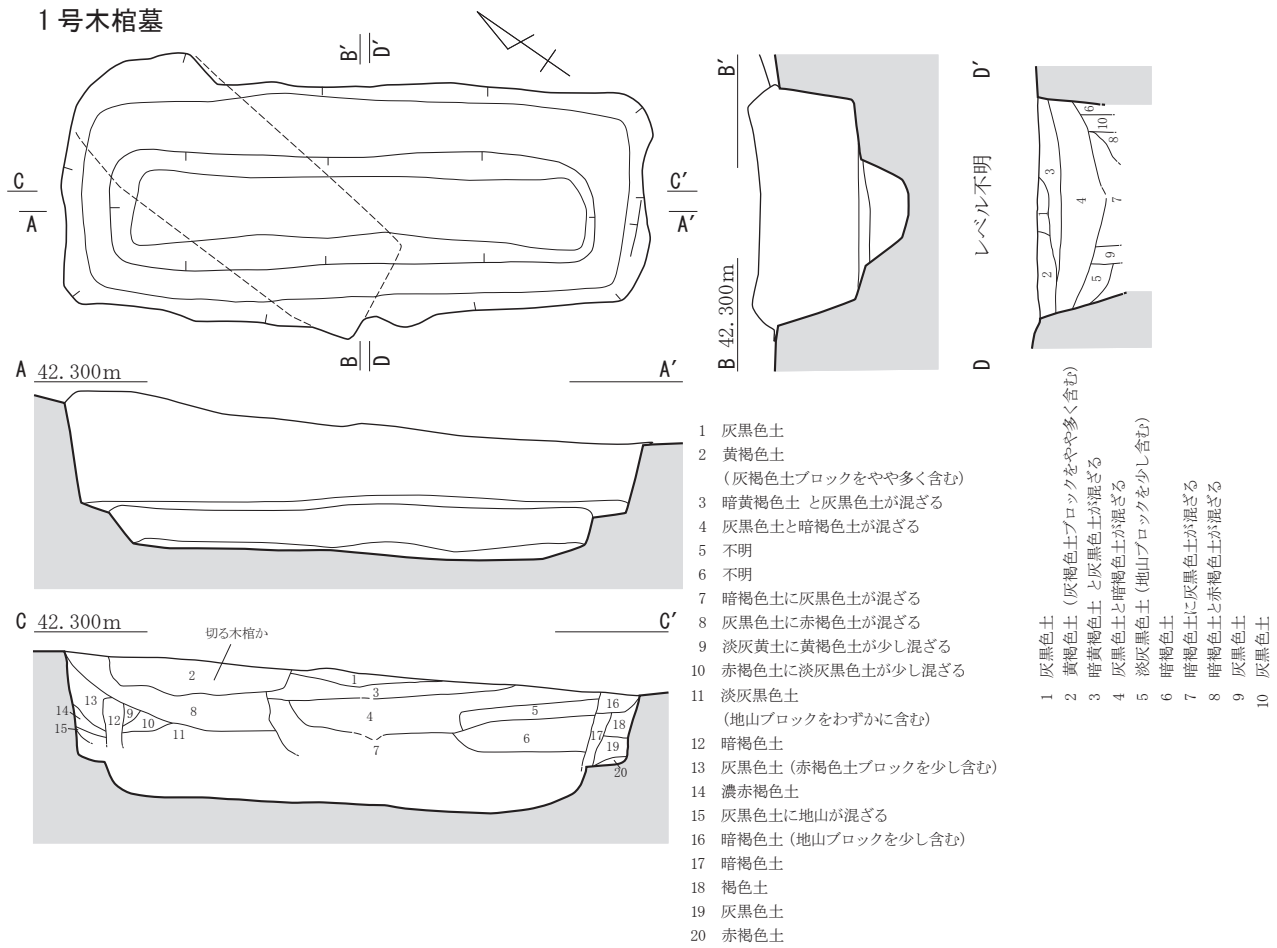
1号周溝墓中央付近で検出した木棺墓である。墓壙は2段掘りで、2次墓壙の形態から割竹型木棺と考えられる。土壙墓に切られる。1次墓壙の規模は長軸 3.14m、短軸 1.29m を測る。埋葬主体は土層から割竹形木棺と考えられる。墓坑の北東側に寄っている。上層付近から粘土塊が数点出土しており、粘土による充填が行われていた可能性も考えられる。出土遺物はみられない。

2号木棺墓 (第3・18・22図)

1号墳西側で検出した大型の木棺墓である。掘り方は平面台形状で、2段掘りである。北側の1次墓壙は浅くテラス状で、南側が2次墓壙となる。墓坑に隣接して、ステップ状の掘り込みがある。墓坑の掘り方からは木槨をもつ組合式木棺が想定される。検出面の埋土は南北で全く異なっており、当初は土坑と墓坑の切り合いと考えていた。墓壙埋土は上層から下層までブロックの含まれない黒色土であったため、土壙と考え、調査を急ぐあまり全体を掘り下げ、土層図は作成していない。十分な精査を行わなかったことが悔やまれる。



第17図 1～4号石棺墓・3号木棺墓平断面図 (S=1/40)



第18図 1・2号木棺墓平・断面図 (S=1/40)

墓壙は2段掘りで、1次墓壙は浅い。2次墓坑上面は灰黒色土、下層は黒色土で水平堆積である。床面付近は、地山の赤褐色土に黒色土ブロックが混ざった土が確認できた。最下層は地山と同色で、黒色土ブロックをやや多く含む。北側の1次墓壙は、2次墓坑に隣接して淡褐色土、その周囲に地山と同色同質の固く締まる黄褐色土が堆積する。検出面では地山との違いは判断できなかったため、淡褐色土の掘削後、床面を追うように壁面の検出に至った。2次墓壙の下半、壁面は地山に似る赤褐色粘土が薄く張り付く。垂直に近い掘り方で面をもつことから、墓壙規模からも木槨が存在していた可能性がある。

特徴的な点は、墓坑内床面には人頭大の自然石が3列計7点配置されており、棺床と考えられる。床面の傾斜と棺床の配置から北東側が頭位と考えられる。東側の石は、平坦面をやや中央に向ける。中央寄りの箇所は故意に打ちかかれたように見える。石の間には、拳大の略方形を呈する石が配置される。この石の上面やや浮いた位置から紡錘車（第22図7）が出土した。中央の2石は互い違いに配置される。西側は、平坦面をやや中央に向け、断面V字形となるよう密着させて配置される。

墓壙規模及び棺床の配置から、棺体の規模は、最大で長さ2.13m以内、幅は0.65mとなる。ただし、壁面付近では棺の痕跡は確認できず、地山と同色の赤褐色粘土であったことから、棺埋置後に粘土による充填が行われていたと考えられる。そのため、棺体は上述した規模より小さいと考えられる。

墓坑の東西両端には、幅25cm、奥行20～25cm程の窪みが作られている。棺体軸上に掘られており、埋葬施設と関連すると考えられる。北側の埋土中から、粘土塊が少量出土した。墓坑に伴うものかは不明である。

3号木棺墓（第3・17図）

上面は削平され、著しく攪乱を受けているため全容は明らかでない。残存部で長軸2.40m、短軸1.12mを測る。南側では列状に並ぶ灰緑色粘土を検出しており、北側は著しく攪乱を受けており粘土を確認できなかったが粘土槨の存在が想定される。主体部は2号墳と同様木棺墓と考えるが、土層からは痕跡を確認できなかった。検出面で自然石が出土したが、墓壙との関係は不明である。出土遺物はみられない。

5) 土壙墓

1号土壙墓（第3・19・22図）

調査区北端、1号墳西側裾部付近で検出した土壙墓である。平面長楕円形で、南側一部を攪乱に切られる。長軸2.18m、短軸0.53～0.63mを測る。床面で長軸1.94m、短軸0.36mを測る。

検出面は赤褐色土の地山に似る土であった。土層から、墓壙の北側は第3層のように崩落した様子が伺えることから、木棺墓の可能性も考えられるが、木棺痕跡は確認できなかった。出土した刀子（第22図10）は、土層から上から切るピット第13層直上より出土しており、墓に伴うものではないと考えられる。

4号土壙墓（第3・19図）

1号墳トレンチにかかる土壙墓である。基盤層を掘り込んでいる。北側はプランがやや不明瞭である。平面プランは長軸1.62m、短軸1.05cmを測る不整楕円形で、2段掘りを呈する。墓壙は掘り方と軸が異なり、長軸0.95m、短軸0.46mを測る。出土遺物なし。

5号土壙墓（第3・20図 図版8）

3号貯蔵穴西側で検出した土壙墓である。平面長方形を呈し、長軸1.98m、短軸0.51mを測る。出土遺物はみられない。

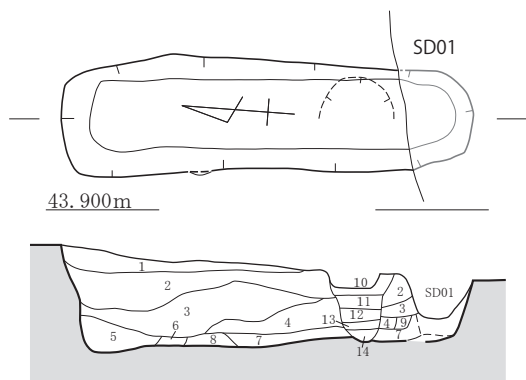
6号土壙墓（第3・20図）

1号墳墳丘裾部南側で検出した土壙墓である。平面長方形を呈する。7号土壙墓と隣接し、軸を一にする。長軸1.24m、短軸0.49mを測る。出土遺物はみられない。

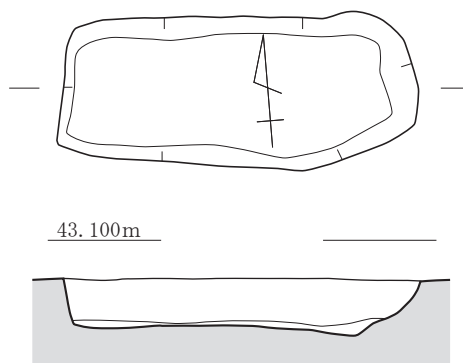
7号土壙墓（第3・20図）

6号土壙墓に隣接して検出した土壙墓である。18号土坑を切る。平面不整長方形を呈する。長軸1.56m、短軸0.53mを測る。出土遺物なし。

1号土墳墓

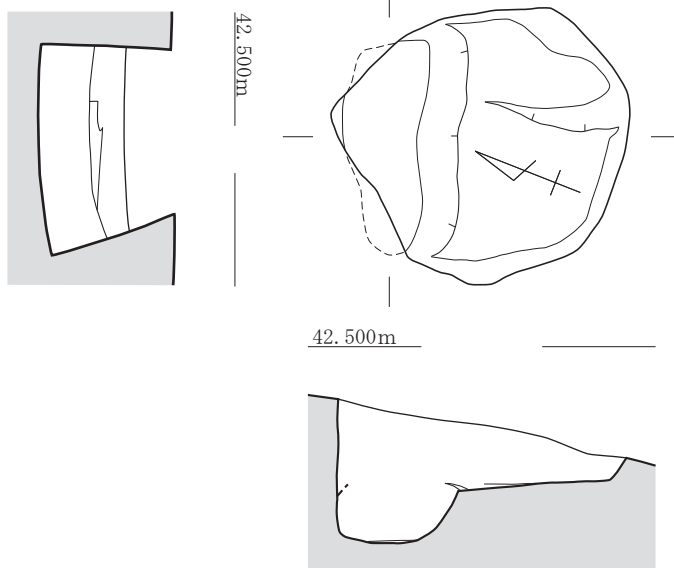


2号土墳墓

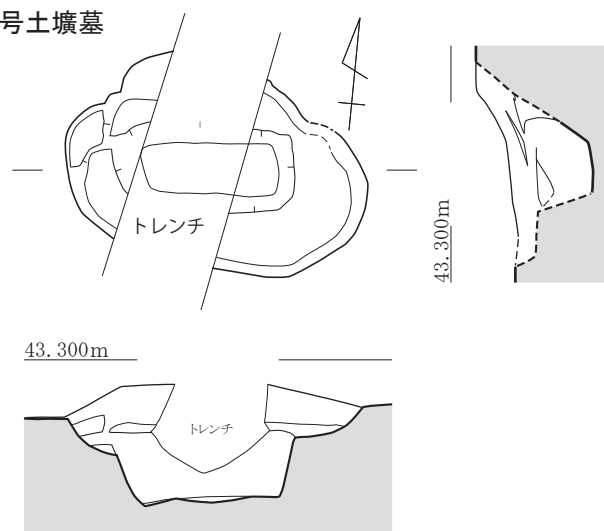


- 1 暗褐色土
- 2 濃赤褐色土
- 3 灰黒色土
- 4 灰黒色土 (第3層より明るい)
- 5 淡灰黒色土
- 6 赤褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 灰色土
- 9 暗褐色土
- 10 赤褐色土 (淡灰黒色土が多く混ざる)
- 11 淡灰黒色土
- 12 暗褐色土 (土器片を含む)
- 13 灰黒色土
- 14 赤褐色土 (灰色土が多く混ざる)

3号土墳墓

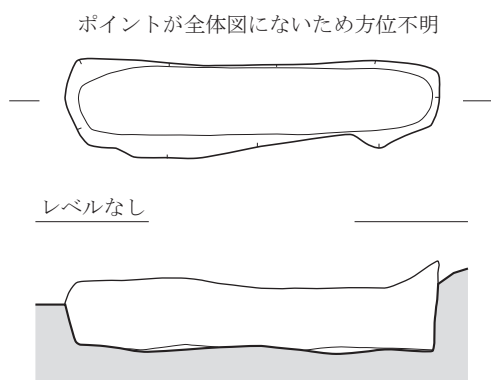


4号土墳墓

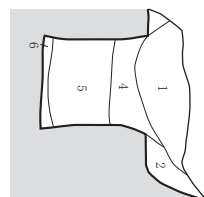


第19図 1～4号土墳墓平・断面図 (S=1/40)

5号土壙墓

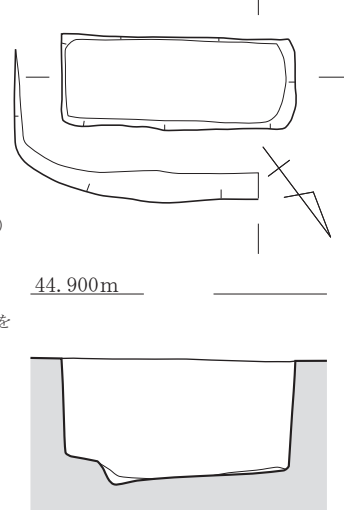


レベルなし

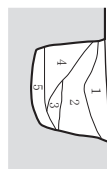


- 1 灰黒色土（地山ブロックを少し含む）
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土（2層と同じ）
- 4 暗褐色土（灰黒色土が多く混ざる）
- 5 灰黒色土（地山ブロック、黄褐色土をやや多く含む）
- 6 褐色土

6号土壙墓

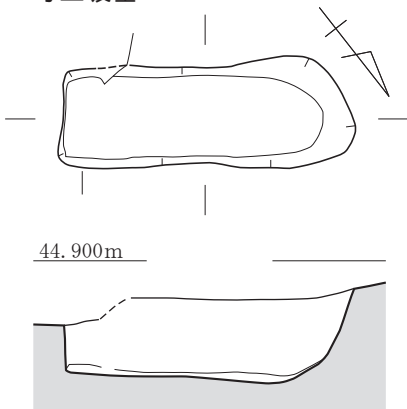


レベルなし



- 1 灰黒色土
- 2 灰黒色土（地山ブロックを少し含む）
- 3 暗褐色土（淡灰黒色土ブロックをわずかに含む）
- 4 暗褐色土（灰黒色土がやや多く混ざる）
- 5 褐色土

7号土壙墓



第20図 5～7号土壙墓平・断面図 (S=1/40)

3. 古代の遺構と遺物

1) 土坑

8号土坑（第3・21図）

7号土坑西側で検出した不整形の土坑である。須恵器提瓶（第21図1）が出土した。

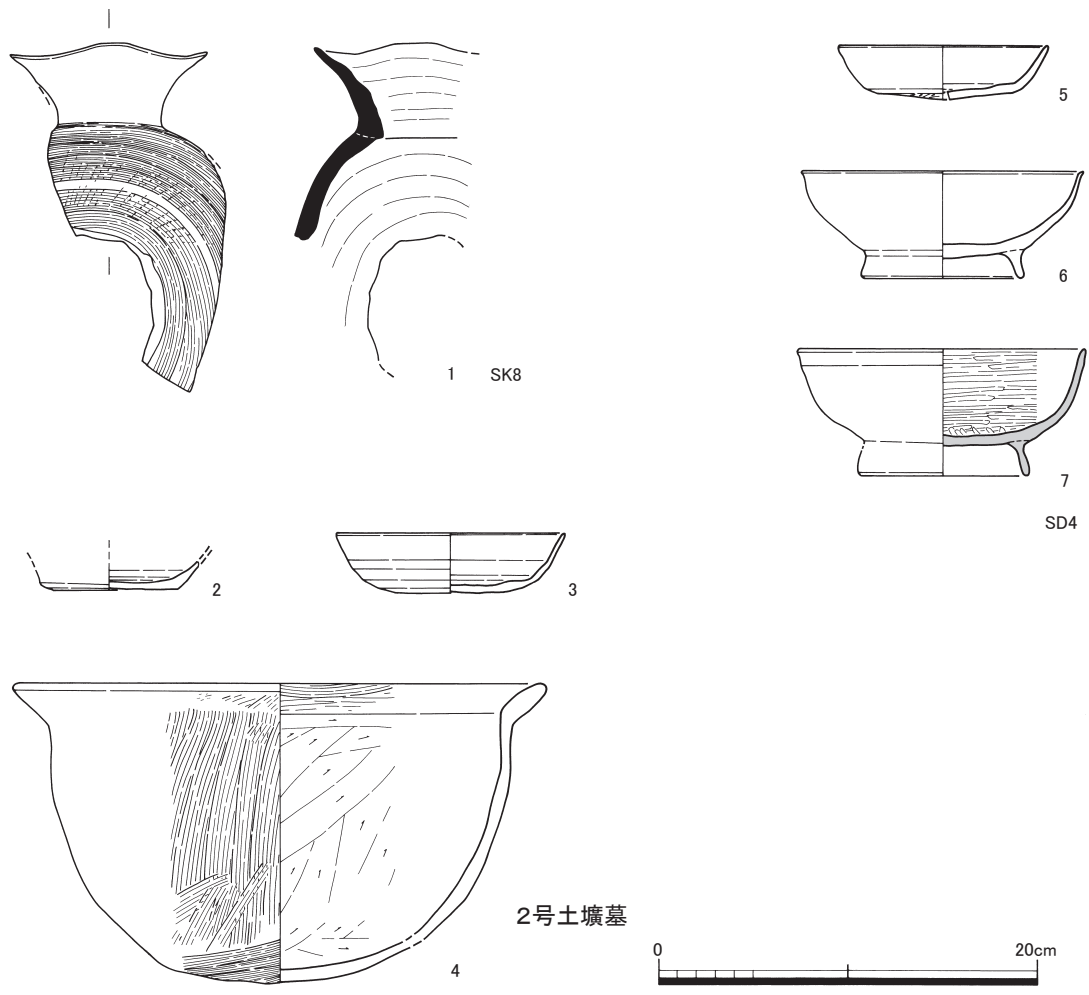
2) 土壙墓

2号土壙墓（第21・22図 図版9）

平面プランはやや歪な隅丸長方形を呈す。墓壙の規模は長軸2.01m、短軸0.79m、深さは最大で0.30mを測る。床面は西側がわずかに高い。埋土は暗灰黒色土に灰白色の花崗岩バイラン土が多く混ざっており、人為的な埋土と考えられる。棺の痕跡は確認できなかったことから、土壙墓と判断した。床面からやや浮いた状態で土師器坏（第21図2・3）が出土した。出土遺物から古代の土壙墓と考えられる。

4. 小結

津古牟田遺跡5では、弥生時代前期の貯蔵穴を検出し、当該地の集落形成がこの時期に始まっていたことがわかる。この丘陵上では弥生時代前期末から甕棺墓地の形成が開始される。中期前半から中期中頃には甕棺墓地の形成が最盛期を迎えるが、中期末から後期初頭には衰退している。同丘陵上の住居跡も後期前半には見られなくなり、後期後半の様相は明らかではない。調査範囲が狭小なため全容は明らかではないが、甕棺墓が確認されていない丘陵西側尾根上には石棺墓が形成されている。その後、この地点には方墳が築造されている。甕棺墓域とは異なる墓域として利用され始める。津古牟田1号墳が丘陵最高所に築造されると、その周辺にも割竹形木棺を主体部とする周溝墓が形成されるなど、丘陵上が墓域として占有されているようになる。



第21图 8号土坑·4号沟·2号土壙墓出土土器实测图 (S=1/4)

第5章 津古牟田遺跡6の遺構と遺物

1. 遺構の内容

調査区は長さ 28.6m、幅 3.2～4.4m の範囲で、津古牟田遺跡 4・5 と同一丘陵上の丘陵南西裾部にあたる(第 3 図)。地形改変が著しく、西側は地形の落ちとなっている。検出された主な遺構は土壙状の遺構が 3 基で、うち 1 基は埋土の様子から攪乱と考えられる。明確な遺構は確認できなかった。

調査区北側で検出した土坑は調査区北側につづく。規模は長軸 1.43+ a m、短軸 1.37+ a m、深さは最大で 1.01m を測る。上層は暗灰色粘質土で客土と考えられる。下層は地山が混ざっており人為的に埋められたと考えられる。西側はピット状に 1 段掘り込まれるが性格不明。出土遺物はみられない。

その南側で検出した土坑状のものは長軸 4.02m、短軸 2.10m、深さは最大で 1.50m を測る。検出面でわずかに土器片が出土したが、中層以下は見られない。下層は暗灰色粘質土に濃黄褐色土ブロックが少量混ざる。

2. 小結

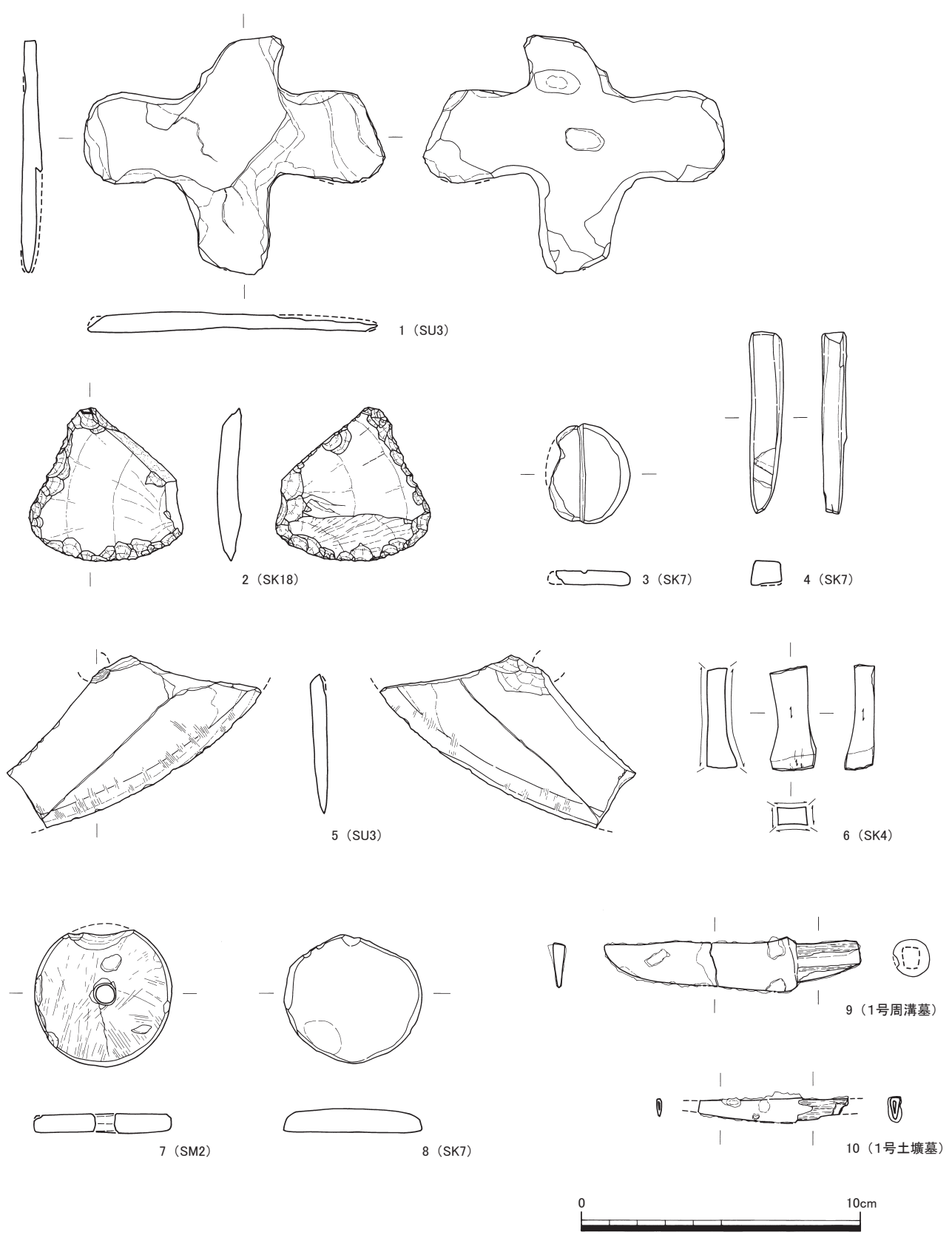
本調査区は丘陵裾部にあたる。2 基の土壙状の遺構を検出したが性格不明である。出土遺物は僅少で明確な集落遺構とは言い難い。ただし、土壙埋土からは人為的な埋戻しの跡が見られ、時期不明ながら丘陵裾部まで集落域が展開していた可能性は考えられる。



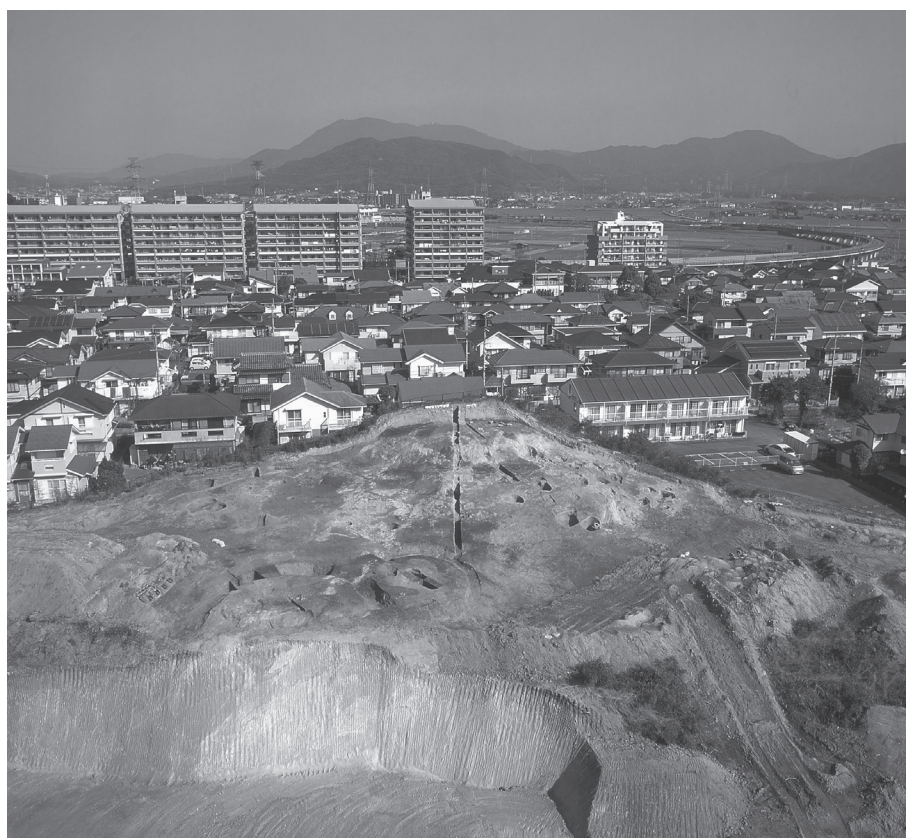
島根大学生発掘調査作業風景



三国中学校職場体験風景



第22図 石製品・土製品・鉄製品実測図 (S=1/2)



調査地全景（南上空から）



調査地全景（西上空から）

図版 2



1・2号周溝墓（上空から）



2号墳（上空から）

図版 3



1号貯蔵穴（南から）



3号貯蔵穴（北から）



3号貯蔵穴十字形石器出土状況
（南東から）

図版 4

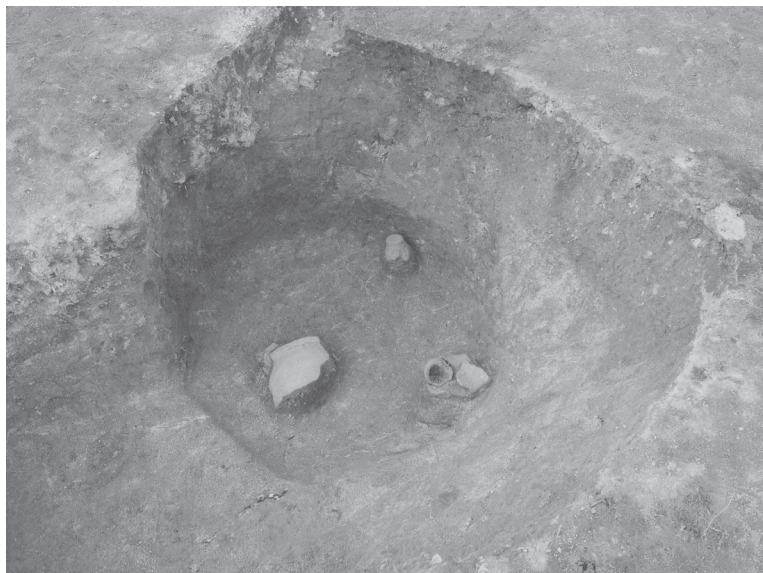
5号土坑（西から）



7号土坑（東から）



11号土坑（南東から）



図版 5



12号土坑（北から）



1号不明遺構（南西から）



1号不明遺構土層断面（東から）

図版 6



1号墳全景（南東から）



1号周溝墓（北東から）



1号木棺墓土層断面（南から）

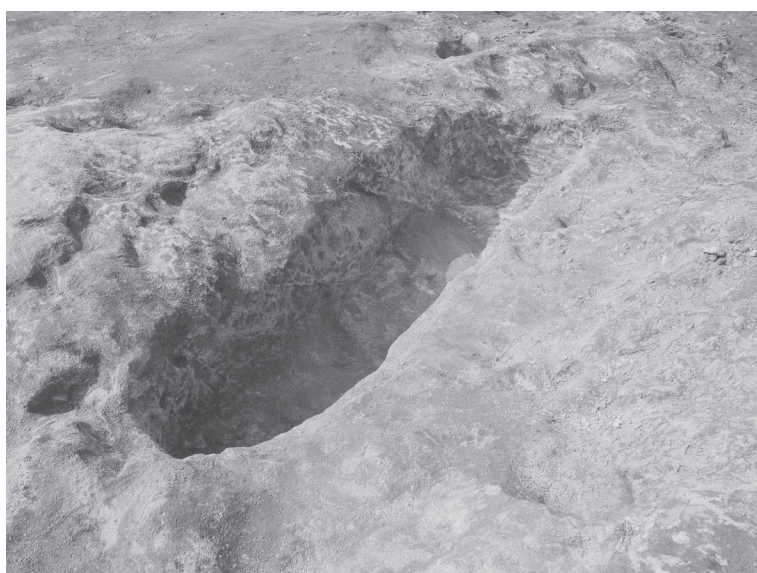
図版 7



3号石棺墓石蓋検出状況（南西から）



3号石棺墓石蓋検出状況（西から）



2号木棺墓検出状況（南西から）

図版 8



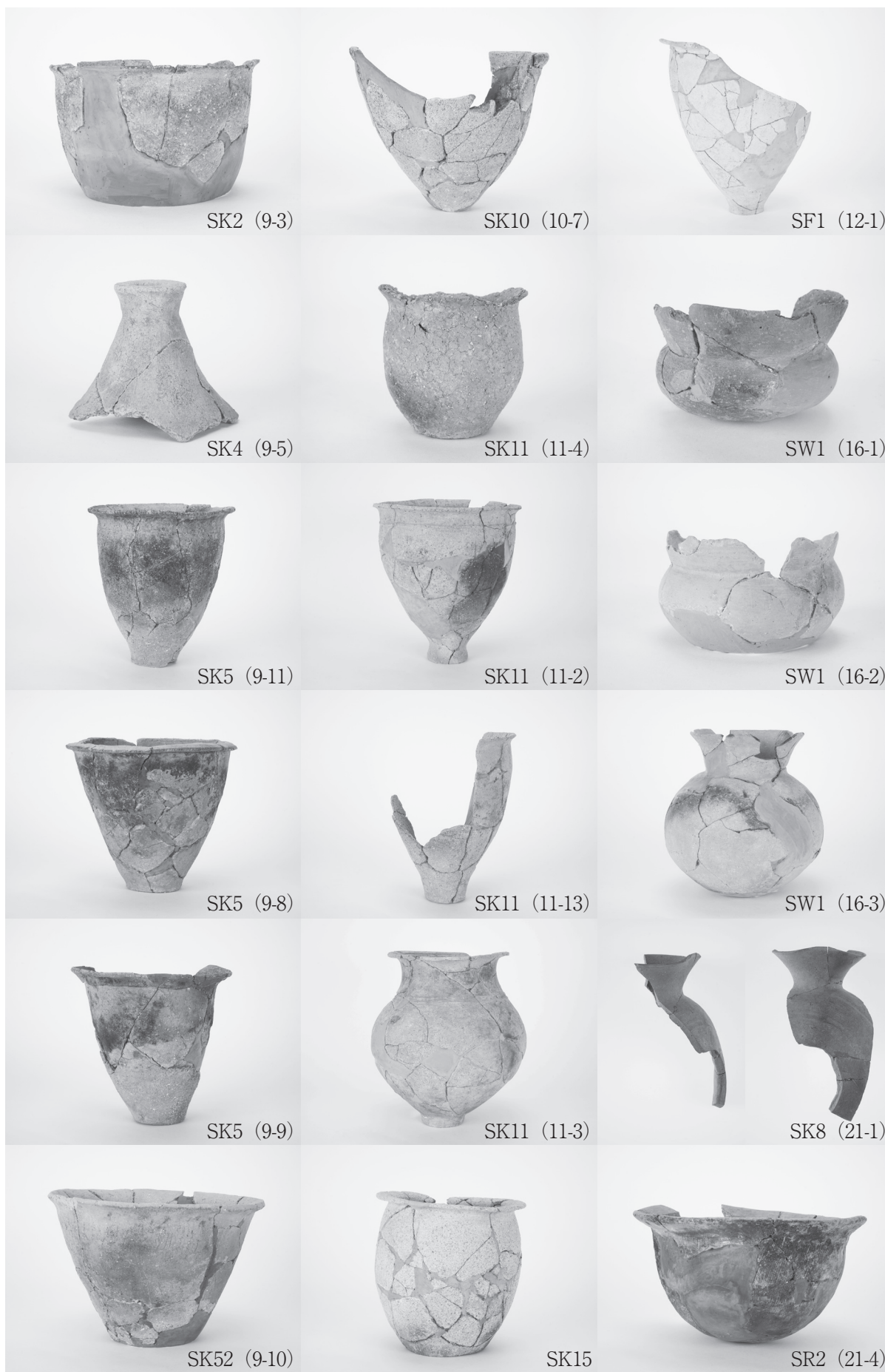
4号石棺墓石蓋検出状況（南東から）



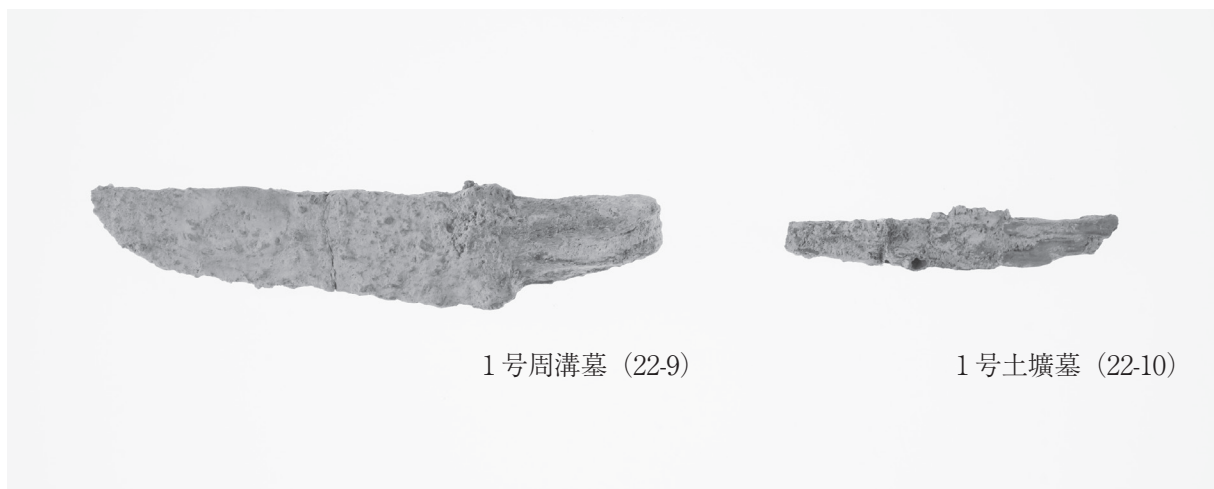
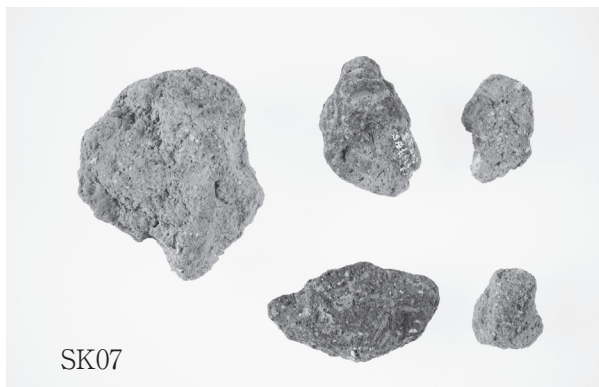
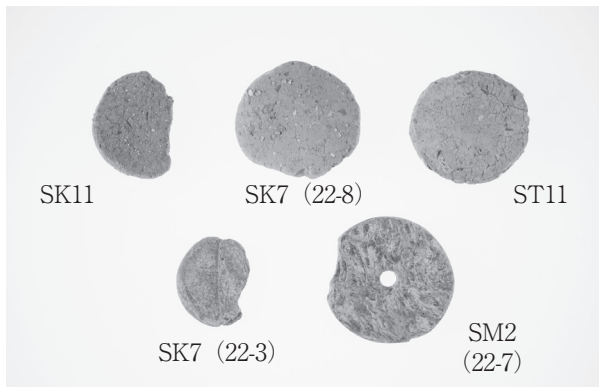
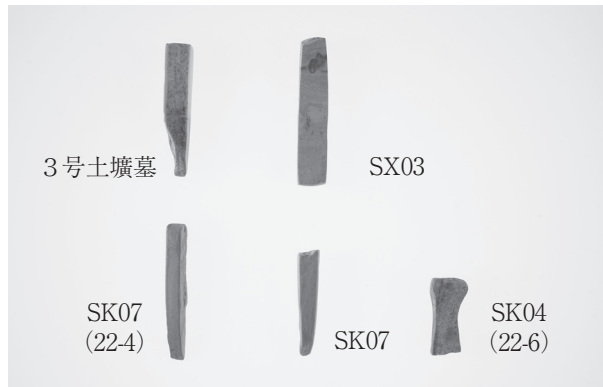
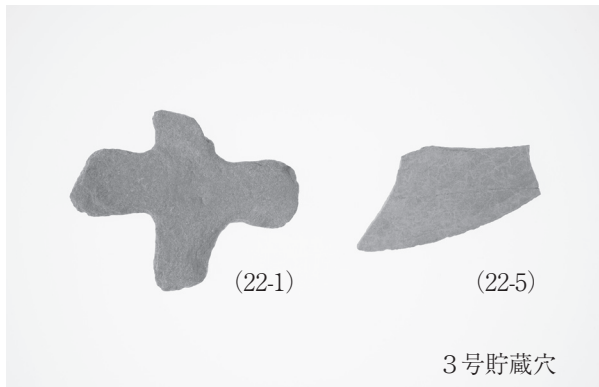
4号石棺墓検出状況（南西から）



5号土壙墓（南西から）



图版 10



報 告 書 抄 録								
ふりがな	つこむたいせき							
書名	津古牟田遺跡 6							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 333 集							
編著者名	龍 孝明							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 Tel.0942-75-7555							
発行年月日	令和 2 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町 村	遺跡 番号					
つこむたいせき 津古牟田遺跡 5	ふくおかけん 福岡県 おごおりし 小郡市 つこ 津古	40216		33° 15' 55"	130° 20' 01"	2017・10・30 ～ 2018・3・31	959.88 m ²	宅地造成
つこむたいせき 津古牟田遺跡 6				33° 26' 54"	130° 33' 31"	2018・5・16 ～ 2018・6・1	214.13 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
津古牟田遺跡 5・6	墳墓 その他の 墓地	弥生 古墳 古代		貯蔵穴 土坑 甕棺墓 祭祀土坑 土壇墓 木棺墓 石棺墓 古墳		弥生土器 土師器 須恵器		
<p>当遺跡はこれまでに 4 次の調査を実施しており、弥生時代中期初頭から後期前半にかけての甕棺墓が展開していることが明らかとなっている。5・6 次調査は、筑紫野市側の隈・西小田遺跡群第 6 地点に連なり、甕棺墓だけでなく、古墳時代前期の円墳や周溝墓があり、今回の調査でもその墓域の広がりを確認できた。</p>								

津古牟田遺跡 6
 小郡市埋蔵文化財調査報告書第 333 集
 令和 2 年 3 月 31 日
 発行 小郡市教育委員会
 小郡市小郡 255-1
 出版 片山印刷有限会社
 小郡市祇園 1-8-15

